

古史傳

自第五十六段
至第五十九段

十二

和書門			
一五〇九	一	號	類
二三〇	函		
二二	架		
二二	冊		

內閣文庫			
一五〇九	一	號	類
二二	冊		
二二	架		
二二	函		
二二	冊		

內閣文庫	
番號和	15091
冊數	22 (12)
函號	269 105



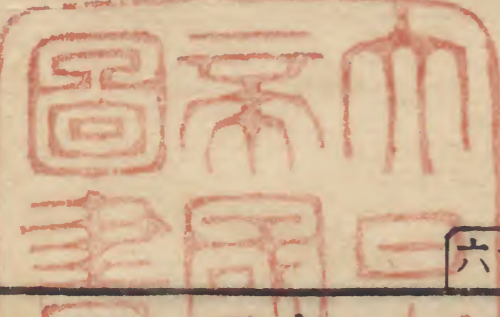
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

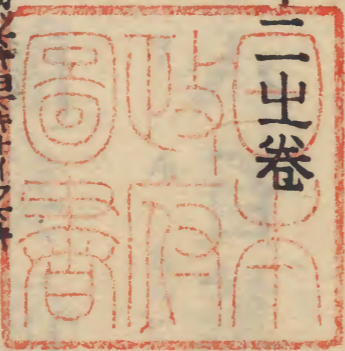




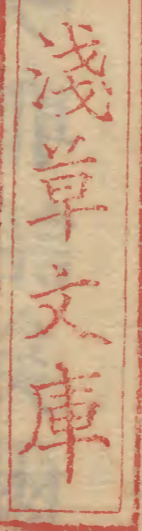
六十五

古史傳十二出卷

神代中四出卷



平篤胤謹撰



男 鐵胤
孫 延胤

續攷

於是天照大御神以爲怪亦聞

看天兒屋根命出廣厚稱辭祈

啓而詔曰頃者人雖多請未有

○古史傳十二

一

カクコトノウルハシキハトノリタマヒテホソメニアケ
若此言出麗美也詔出而細開
アメノイハヤドラテヨリウチノリタマヘルハヨリアガコモリ
天石屋戸而自内詔者因吾隱
マスニテガモフヲアマノハラオノヅカラクラクアシハラノナカツクニ
坐而以為天原自暗葦原中因
モミナクラケムトナドテアマノウズメハシレ
亦皆闇矣何由天宇受賣者為
アソビマタヤホヨロヅノカミモロクワラフゾトノリタマヒキコニ
樂亦八百萬神諸咲耶詔矣爾

アマノウズメマサリナガミコトニテタフトキカミイマスガ
天宇受賣益汝命而貴神坐出
ユヱニエラギアソブトマラシキカクマラスアヒダニ
故。噓樂遊也白矣。如此言出間。
アマノフトタミノミコトサシイデカノカミヲテミセマツルト
天太玉命。指出其鏡而示奉出
キニアマテラスオホミカミイヨ、オモホシアヤレトテヤ、ヨリ
時。天照大御神。逾思奇而稍自
トイデテノゾミマストキニカノカクリタテルアマノ
戸出而臨坐出時。其隱立出天

タ^{チカラ}ヲノカミヒキアケソノイハトヲトリソノ^三
手力男神引開其石戸。取其御^二
テヲテマツリヒキイダシキ^{スナハチナカトミノカミイミベノ}
手而奉引出矣。即中臣神忌部^一
カミヲシリクメナハヒキワタシソノ^三シリヘニ
神以尻久米繩控度其御後方^一
テマヲレヨリコレウチニナカヘリイリマシトキ
而。白言從此以內。勿還入坐矣。
コノトキモテカミヲイレソノイハヤニシカバフレトニテ
是時以鏡入其石窟則觸戸而

スコシキズツケリソノキズニイマナホアリコレスナハチイ
小瑕矣。其瑕於今仍存。此即伊
セニイツキマツルオホカミニマス
勢崇祕出大神也。

於是天兒屋根命と云と云。詔曰。まで。書紀^{石屋段第一}。於
是天兒屋命云。廣厚稱辭祈啓矣。于時日神聞之曰。頃者
人雖多請未有若此言之麗美者也。乃細開磐戸而窺之。と
あるを取て。文を作せ。○廣厚稱辭。比呂伎阿都伎多
多閉基登と訓べし。常言まを廣く厚きといへど。廣伎多
多閉。師の水を湛ると同言ふて。満足ハ以意おめ。今世

此言^レ。海^ノ渚^ノの満^ル地^ヲをま^ニ依^ルを。志^ハ不^クのあ^リ。予^ト云^フも同^シ。
と^レ言^ハれし如^ク。其^ノ神^ハ此^ノ御^ノ德^ヲ字^ニ。彌^ヤ廣^{ヒロ}爾^ニ彌^ヤ高^{タカ}ふ。言^ハ舉^ゲ盡^{ツク}は
を云^ハあり。諸^ノ祝^ノ詞^ヲふ。其^ノ奉^ル種^ノく^ノ物^ノ名^ヲを舉^ゲて。其^ノ事^ヲ仕^ス
奉^ル依^ル人^ノの勞^ヲをさ^ス予^ヲ。太^ニく言^ハ舉^ルも。本^ヲそ^ノの神^ヲを崇^メ
む^ル起^スる^ルふ^テ。稱^シ辭^ヲ竟^テと^レ依^ル竟^マと^レ下^ル。第五^十九^段。ふ。祓^ハ
竟^トと^レ依^ル竟^モ。稱^シ盡^{ツク}し。祓^ヒ盡^ク意^ヲお^シ。加^ハ茂^翁說^ス。万^葉子^ノ
む^カく^レしこそ。鳥^梅を折^ルお^シ。多^努之^岐乎^倍米^{。古}を家^持
卿^ノの追^ヒ和^シし哥^{。春}裏^之樂^終者^{。と}と^レ免^ル終^モ共^ニお^シ樂^ミ
を益^スは^レこと。ち^てか^く稱^シ辭^ヲ祈^テ啓^シ給^フ予^ヲ依^ルを。何^ニ對^シひ^テ。
白^シ給^ヘと^レ云^ハむ^ス。此^ヲま^ニお^シ此^ノ時^ヲふ。か^く殊^更了^{。神}事^ハ
麗^美く。種^ノく^ノ設^テ備^ヘて。嚴^重ふ仕^奉て給^ヘ依^ハ。大^御神^ノふ

獻^テ給^フ予^ヲめと云^ハも非^ズ。外^ニお貴^キ神^御坐^ハは^レお依^テ。其^ノ神^ハ
お獻^ルめ。稱^シ辭^モ。其^ノ神^ヲ白^シ給^フ予^ヲ依^ル狀^ヲあり。門^ノ人^ノある新^田
日^道茂^ガ說^ハふ。御^鏡子^ヲ向^テ白^シ給^ヘる^ルれ^ト云^ハ予^ヲ依^ルを。然^ラ
る^ノ說^ハお^シ。さ^るる^ル此^ノ時^ヲふ。設^テ備^ヘて。獻^ラま^スる^ル物^等の中^ニ
大^御光^ヲを学^ビ移^セる^ル御^鏡お^シま^ス。有^グ中^ノも主^トと^レ依^ル
御^物お^シま^ス。有^グ故^{。此}の御^鏡子^ヲ向^キて。稱^シ辭^ヲ白^シ給^ヘ依^ル
を。さ^も有^ベき御^事あり。此^ノ御^鏡後^ニお大^御神^ノの^大聞^ク看^ル
を。上^ニ第四^十段。ふ出^テと^レ。○頃^者を。許^シ能^キ基^呂と^レ訓^ハし。即^チ本^書
か^く訓^ハれ。○雖^モ多^ク請^ハえ。佐^ハ波^邇麻^袁世^村母^ヲと^レ訓^ハし。此^ノ本^書
ま^あ。お大^御言^ヲを思^フ。お大^御神^ノの石^屋戸^ヲを刺^シて。幽^居
せ依^ル不^トと^レり。神^等此^ノ各^ノ某^ノく^ノふ。出^テ御^ハおと^レ殘^リ請^ハ啓^セ

亦も多し有しこと知られと也。○未有若此言之麗美。此師の訓ふと云。あゝの大御言此總ての意を按ふよ。我が石屋戸を刺て幽居るとゆ。神とち此。出御此と字請啓せるも多ふまど。かく言のうるをしきを有らざ也しを。今兒屋命此祈啓の言此。かく麗美は。いうれる貴き神此有て。かく申はやらむと。其詞ふ甚く感何やしみ給へる也。○細開而本曾米爾阿祁氏と訓べし。此米は所見の切也。○自内詔者。本は内告者とあるを師の此上。自内歌私よ替とるあり。師云。此を沼河比賣段ふ。未開戸自内歌

日とあるふ似ある文也。内與理能理給閉留波と訓べ也。○自暗師云。おれ自也。上の自我勝場云而。とある自も同じ。其意彼処。下自自照明矣。とある自も是也。○皆闇は美那久良祁牟と訓べし。古言あり。此祁牟を。加良牟と云よ同じ。例に古き哥。○以爲を淤母布袁と訓べし。此袁を爾と云むが如し。○何由を。那杼氏と訓べ也。本はた。由何れぞ。無ても聞。○咲耶ハ。和良布叙を訓べし。問言。叙也。まむ除き於。○益を。麻佐理と古言あり。此を怪みの餘。小問給ふ也。○益を。麻佐理氏と訓べし。但し此を借字よ。○嘘樂遊也。本を歡喜咲樂歡喜咲の三字を。惠良岐とをみ。樂字を阿蘇夫と訓れ。るよ依り。嘘樂字を。書紀よ取り。遊字を私よ加へて文を

作し噓樂二字を惠良岐と訓み。即書紀ふちり訓り此を
於にむ多此字を填られしは遊字を常此如く阿曾夫
て決免て古訓あるべくわおも也。遊字を常此如く阿曾夫
と訓はし。惠良具とを師説ふ咲榮樂を云。統紀廿六
大詔に御酒乎赤丹乃保仁多末倍惠良伎云。まよ三十比
詔ふもかく見え万葉十九よ豊宴見為今日者云。千年
保伎保伎吉等餘毛之惠良くく。ちて此を宇受賣命此謀
尔仕奉乎見之貴佐おど何ゆ。ちて此を宇受賣命此謀
て申次詞ふて己が俳優を諸神の咲とを合せて眞實お
おもえろく。樂み何ぢぶさほふ言ふせ依あり。と何也。
記傳八卷。ちて惠良岐に噓樂字を書れしを玉篇に噓同
見るべし。ちて惠良岐に噓樂字を書れしを玉篇に噓同
噓大笑也とあるに依て此字を取おくもおも大笑ふ意
此みおて樂みの意をた故に樂字を合せて書れしある

はし。亦是に就て按よ。神樂を加具良と訓むことをもと
とるよ。其意を得て。神樂字を填るべし。牟久の
濁音ふうおに其具の宇韻はれむ。惠のむぶるべき語
勢あるをく。ちて惠良の惠を咲の惠と同く。壓笑良の
思ひ辨ふべし。ちて惠良の惠を咲の惠と同く。壓笑良の
れを。まよ笑の和良を。惠良と同言ふて。万葉歌に保伎吉
等餘毛之惠良惠良爾。あや何依を思ふ。本を咲ふ状と
て出さる言あるはし。世よも惠良くく笑ふあど云免也。
まよけらく笑ふと云もこの轉れるあり。まよへら笑
あども云り出羽の秋田あどよてさ依がう事して甚く
笑ふをへらさ依と云此も。○其鏡を。即上文に賢木よ懸
と依八咫鏡あり。○示奉は師云美世麻都流と訓べし。顯
宗紀。孝德紀。れど奉示と何也。神武神功仁徳あどの卷
よも示字を美須を訓り。

侍てまれば御鏡を見せ奉まるからふ。日神の御光、うたて
てモハラヒト全等しく照テかゞやくを以て。汝命カに勝りて貴神とた。
即此御鏡を申セあせるもれあす。如此カ為るたいと浅カなり
の意あり。後世のあるざりし死心を以て疑ふおと勿れ
さて此御鏡を日像鏡と申て、日神の御像を摸カし、ほと其
御光のうたまるを以て言ハあれむ。汝命と等しき神とこ
そ申ハべ死カを勝テて貴と云ハるハ甚クしく云ハいあせるもの
あ。か此日蔭カゲ縷カマをまゑるも。上ハ此髪を頭カを垂カゆるもの
る料ありと云ること。雞を鳴せとるも。皆此貴神坐て。世
此ハ思ハひ合ハはべし。雞を鳴せとるも。皆此貴神坐て。世
を照し給ふおと。日神ハ同カ支カをし。玦カ示カしゑるもれあす。
纂疏の説あり。○逾思イヨモ奇オモシ而シテとた。師云。此御鏡也。已命ヒトと等シ
と。非言ヒトれり。○照明テ々カきを御覽ミして。實マコト小宇受賣ウケウれ申せる如く。貴神坐カミ

にハあハとカとカ。奇オモシみ御思オモあす。上カ小怪オモシみ以カ爲カせるを承て。逾
やと云あす。○稍オモシと。師説シ今世の言ハ。漸カくお少カの意ハ
見ミ依カべし。稍オモシと少カとを語ハ。○臨坐ミ之時トキ。師説シ。臨ミと。字鏡カお
加カく不カ又カ乃カ曾カ久カと。同カ。今思カふ。能カ曾カ牟カと。能カ曾カ久カ
无カと。有カる如カく。能カ曾カ久カと。同カ。今思カふ。能カ曾カ牟カと。能カ曾カ久カ
とた。意異カあるが如カく。おれぞ。中務家集ナカニツカ。池カのカきカゑ
依カ松カ小藤カかカまカす。と云ハひ。源氏推本ゲンジシキ。卷カも。水カも。れぞ。死
ある廊カ子カ云ハく。あカぞ。あり。此カら。臨カを。能カ曾カ久カと。云ハ。今カは。能
曾カ伎カ坐カを。臨カ坐カと。ほカまカむ。相カ通カひて。本カ同カ言カあカめ。但カし。此カを。
と。ほカまカむ。物カの。間カあカと。と。り。闕カと。と。少カ異カも。と。ほカす。侍カて。上
て。あカ事カの。情カ状カを。うカかカひ。見カる。意カあり。と。ほカす。侍カて。上
小カ稍カ從カ戸カ出カ而カと。ほカる。故カふ。石屋戸イシヤド。此カ外カ子カ。出カ御カる。おと。聞

ゆきども然らば。細開ある間を。稍御體を出して。臨坐
依としあす。下文。奉引出とあるを以て。思ひ辨ふべし。
戸外。出御するあらむ。奉引出と有る。○引開其石
戸は。本。此文。今。書紀。古語拾遺。共。天。手力雄神。
侍。磐戸。側。引開之者。とある。ふ依て。補。予。り。必。有。べ
き。文。加。の。細。開。給。へ。ゆ。し。石。戸。を。皆。ぐ。ら。引。開。と。る。由。あ。ゆ。
あ。り。爲。年。と。て。形。も。御。戸。掖。ふ。隱。立。し。き。依。世。此。時。石。戸
を。投。給。予。る。信。濃。因。子。落。て。山。と。化。れ。る。そ。ま。戸。隱。山。あ
り。と。言。傳。ふ。依。る。美。濃。因。喪。山。あ。ぢ。の。故。事。を。思。ふ。よ。然。も
有。べ。く。お。不。え。と。り。春。日。社。記。よ。天。手。力。雄。神。信。濃。因。戸。隱
明。神。是。也。と。有。る。傳。る。事。ふ。や。ま。と。信。濃。因。地。名。考。よ。も。
古。説。を。引。て。戸。隱。神。社。を。手。力。男。神。あ。る。由。云。り。は。て。戸。隱
む。ト。ガ。ク。リ。と。訓。べ。き。を。訛。り。て。ト。ガ。ク。レ。と。言。ひ。あ。ら。へ
る。○取。其。御。手。而。は。師。云。此。取。字。を。舊。く。多。麻。波。理。と。訓

也。書紀よ奉承と書。ちれど此訓を。後世の語。あぢ
る。其。を。も。然。訓。り。ば。猶。字。の。隨。ふ。登。理。氏。と。訓。は。し。○奉。引。出。矣。本。よ。引。出
今。ハ。書。紀。よ。引。而。奉。出。せ。り。師。説。ふ。此。う。て。此。神。此。名。義。何
る。よ。依。て。奉。字。を。補。へ。也。ら。は。き。ぬ。也。戸。掖。引。開。む。ふ。を。本。と。ゆ。れ。と。御。手。を。取。て
引。出。し。奉。年。ふ。も。手。力。の。優。と。ら。む。神。を。充。げ。き。お。さ。あ。り
加。し。延。喜。六。年。日。本。紀。竟。宴。阿。刀。春。海。哥。止。已。也。美。母。多
乃。之。支。美。与。止。奈。利。介。雷。波。安。女。多。知。加。良。乎。多。須。介
安。利。と。何。ゆ。ち。て。此。神。か。く。石。戸。を。引。開。ぬ。る。へ。る。ふ。依。て。
介。利。亦。名。を。天。石。戸。別。命。ま。と。天。石。都。倭。ま。と。明。日。名。門。命。と。を
申。し。あ。ゆ。り。也。ふ。を。見。る。べ。し。○中。臣。神。と。を。天。兒。屋。命。を
申。し。忌。部。神。と。を。天。太。玉。命。を。申。せ。也。古。事。記。よ。布。刀。玉
命。と。此。み。あ。ら。ま。ど。繩

を引ことと必二人してもの。○尻久米繩を。師説ふ。今い
はべき事故。書紀を取ま。約むれむ。おのぼら理久。標結あどの意
ふ志米繩あり。言依あり。又思ふ。志米を標結あどの意
う。然らば尻久米と物を一。よて名を別ある。但し標も
本をこの尻久米より出とる事。ふや然らば活用て志牟
とも云む。や。土佐日記。ふ。おへのかど。此志。正く米。おは
とあり。尻を藁の本をいひ。久米を許米。ふて。許母理を久
米。師の冠辞考。さ。尻竹の條。委く見ゆ。然れ。バ。其藁の尻
例。よて。許米を。も。久米と云べきこと。疑ひ。あし。藁の尻
を断去。びて。さ。れ。づら。許米置とる繩あり。許米と。枕。冊
米。お。ぞ。あり。許米。よて。俗。子。某。具。留。米。と。云。是。あり。具。字。の
意。ふ。近。し。今。云。谷。川。氏。も。既。く。尻。指。藁。本。俱。梅。籠。之。也。とい
ゆ。書紀。よ。端。出。之。繩。と。作。て。此。云。斯。梨。俱。梅。難。波。此。下。よ。示
ゆる。四字。を。後。人。の。ぞ。有。ふ。て。知。ば。し。端。出。と。を。断。さ。る。藁
加。と。る。お。依。べ。し。

此尻の出る由。よて。即後世の志米繩の状あり。此繩も。此
ぐさ理を云説。何まど。み。お。例。此。ひ。ぐ。お。と。れ。り。和。名。抄。ふ
顔。氏。家。訓。此。注。連。字。を。挙。て。之。利。久。倍。奈。波。ぞ。云。ま。ど。と。く
當。れ。り。と。ま。と。加。茂。大。人。説。ふ。を。尻。を。後。方。此。意。久。米。を。限
も。所。思。ひ。目。ふ。て。今。天。照。大。御。神。の。御。後。方。引。こ。し。ぬ。る。限。目。の
繩。を。依。意。あり。と。何。る。も。然。る。お。と。れ。り。孰。お。ら。む。決。然。回
し。と。あり。されど。篤胤。を。師。説。は。て。此。を。亦。日。御。綱。と。も。云
ふ。其。を。次。段。よ。見。え。ぬ。也。○御。後。方。を。師。云。美。斯。理。幣。を。訓
可。し。齊。明。紀。ふ。後。方。を。斯。梨。敵。と。訓。る。例。あり。即。目。方。ふ。對
と。る。名。よ。て。尻。方。の。意。あり。○控。度。師。云。如。此。爲。し。所。由。を。
次。此。語。ふ。て。知。ら。る。後。世。ふ。神。事。よ。引。互。に。も。同。意。よ。て。隔

をあせるれ也。○勿還入坐矣。本本子不得還入入と有在。其
師訓師訓ふ那加幣理伊理麻志曾と訓訓はし。○是時以鏡入其
石窟石窟則則是是より大神也。書書まの鏡を。彼八咫鏡を云。さ
て大御神此出坐る御何と。此御鏡を入ゑるまとを。淡
き所由所由何ることあ依可可し。○觸戸觸戸而而石屋石屋ふ入依くと
て。戸戸ふ衝觸衝觸と依由れり。此大御神を引出奉奉して復還
入坐入坐むまとを恐恐き思ひて。尻久米繩尻久米繩を引引亘亘しおど。何は
ああく爲爲おるままふ過過して戸戸ふ突當突當とるふや有ら
む。○小瑕小瑕矣。訓訓れしし依とれど。少少う更更免免て。須許斯伎
受都祁理受都祁理と訓訓はし。瑕瑕を字書字書み。玉玉の疵疵を
いふと見見えより。石戸石戸ふ觸觸ら

むむま瑕瑕付付こと有有ははきああ也。此を以ても。大御神のまも
有有しことを知知べき物物あり。ああの御屋御屋あらむむま突突
ふまふまとるむむりりりよて。瑕瑕おおくままと有有ままじじくくああそ。但
し此此を過過りて爲爲おる事事ふま何何ままぞ。幽契幽契何何る事事とぞ思
はる。其其を始始ふ大御神大御神齋服屋齋服屋ふ御坐御坐て。神衣神衣を織織て給
牙依時牙依時よ。須佐之男命須佐之男命。その屋棟屋棟を穿穿て。天斑馬天斑馬を墮墮入入と
はひしうはひしうむ。大御神見畏見畏まして。梭梭を以て大御身大御身を傷傷ひ
給給牙牙る字思字思ふま。此御鏡御鏡を瑕付瑕付るままとを。彼由縁由縁ふとる
事事ふて。末終末終ふ御靈實御靈實とあり給給牙依牙依御鏡御鏡ある故故。かく
まで幽幽き因縁因縁の具具れるま非非じじうう。と想像想像奉奉らままああ也。
何れ何れのしのしま。○其瑕其瑕於今仍存於今仍存ままの事事ハ。既既ふ上上うう云云りき。

第四十五段、三面の神鏡の事を取總て云へる處、披見るべし。○此即伊勢崇祕之大神也。おの事も上第四十五段、小既了注へ也。その委き事ハ、第一百五年の處、ふ云ふを見よべし。

於是天照大御神遷坐其新宮。

天兒屋根命天太玉命廻懸日

出御綱而令大宮能賣命

比賣命亦名天宇受賣命亦名
宮比神亦名矢出波波伎神
侍其御前今世内侍以善言美
悅懌辰令天石戸別命亦名擲
襟也
亦名豐
石窓命
守衛其殿門而天太玉
命大殿祭御門祭供奉矣故天

ウズメノミコトハ三カムノコサルメノキミラガ
宇受賣命者御巫猿女君等出

カヤナリツギニアマノイハトワケノカミコノカミハ三
祖也次天石門別神此神者御

カドノカミナリマタノミナハマラスアケタツノミコトト
門出神也亦名謂阿居太都命

マタノミナハアノセヲノミコトコハイヌカヒアガタノイヌ
亦名天背男命此者犬養縣犬

カヒノムラジミヤノベノミヤツコイマキノムラジオホクラノムラジオホ
養連宮部造今木連巨掠連大

クラオキソメノムラジラガオヤナリ
掠置始連等出祖也

其新宮とは手置帆負命日子狹知命此造立とるかの御
殿あり。○日之御綱也。本書ふ。今斯利久迷繩是也とあり。
是也の間お日影之像の四字あるを今ハ畧て引ぬ其を
師説ふこれ附會の説あり藁の尻此出あるを以て如此
さまふ言ふせむ更上代此然れむ尻久米繩の一名お
意より系むと有ふとま也。然れむ尻久米繩の一名お
ゆり也。那波てふ言此義を口訣に直ありと云り此ハ漢
と聞ゆれど万葉に飛彈人のうた墨繩のと直きことと
譬あるおを思ふも然も有らむも知べうらびまと那
比ふても○廻懸也。今もはる如く宮の四方お懸廻ら
る也。上の控度は多く石屋の戸お此み引直せる由あり。

控度と懸廻を語ふこのちて石屋戸ふ繩を引直と依を
差何也思混ふべうらび
大御神の還入坐むまとを思ひてお依多此新宮ふ引廻
ぬるを禍神此入來てまとも禍事せむこと成恐まてお
也。其ハ下より引る祝詞文の後世ふも神事のをゆ。尻久米
意を尋て思ひ辨べし
繩を引廻らびおとを即此意おゆ。或説ふ今雖曠野中強
加足者豈非神化之深乎読者宜ちて此繩此状を書紀口
致思焉と云るを然る言あり
訣ふ麤藁左糾出端といひ纂疏ふ端出者絢索而不整雪
其苾端おぞあるよて今も爲る志米繩の状あること知
ばし。然不この外ふ諸書ふ云る ○大宮能賣命宮比神矢
説ども何まど皆非お也
之波く伎神御名の義下よ云ばし。○令侍其御前御前也。

大御神の御前ふおめ侍を師説ふ佐母良布と訓ばし。佐
を眞此意母良布ハ母流を延とる言よて母流を何事
ふまれ心を扱て伺ひ居るを云。扱は物を守ると云
云也此意あり又目を扱て物を扱くと見ると云
もると云も此意お也又候風おと云も泊舟のとき風を
待伺ひ居るをされを仰せ賜ふ事おぞ有らむ奉らむと
云て同意あり
伺ひ居る意よて凡て君の御前ふ在るを佐母良布と云
お也垂仁卷よ木實持參上而侍履仲卷ふ既平訖參上而
侍万葉二ふ雖侍候佐母良比不得氏二十よ佐毛良布等
和我乎流等伎爾おど何也。ちて此より轉めて後よハ侍
まよ侍ふ処を指ても侍と云也さて又君の御前ふ在る
を云くめ轉りてあぶ對ふ人を敬ひて云語よも己がう

予の事も凡て添言とくおまゆ。譬へむ見るを見侍
ふ聞を聞侍ふと云ぐ如し。さて此言をもと佐母良布あ
依を中昔とりて佐母良布とひ又約て曾呂も云むいと
ふ字ぞ訛て佐母良布と云ひ又約て曾呂も云むいと
いと俗し。さて又波牟倍理と云言あり。波倍理とも云む
佐母良布と全ら同じさま用ひてもととめ言の意も
甚近し。故同く侍字を書あり。但昔とめ佐母良布も侍
字をも候字をも書。波牟倍理も侍字をのみ書て候
字字書ことおし。こき波牟倍理ハ。貴人此御前お在
る意のみおて伺ふ意をおき故おやあらむさて続紀宣
命おどよも侍と云こと多し。皆佐母良布と訓ても波閉
理と訓てもとろし。○今云此師説を記傳十四卷み大圀
主神の八十垺手隱而侍と申給へる処み記されとるあ
るを此よとりて注せり。お波倍流てふ言のものと此意
をも委曲お解れとるを此よ云れしよて。此神を御前
を洩しつ。本書よ就て見べし。云れしよて。此神を御前
侍を志久と依事の由をも知べし。○内侍ハ。宇知都美佐
牟良比と訓べし。即本書ふウチツ刀セフラヒとある古
訓よ依れ。刀セはミサの古假字あり。

フを音便お名義男を外事を専と仕奉るを内御屋お侍
れバとらび。後ハ字音よ。那。けて此官の始を。或説
ひ仕ふる由お。後ハ字音よ。那。けて此官の始を。或説
ふ。此の大宮賣命の故事と起れる由云依を。信お然る
説おて。廣成宿禰也。お此記さまと依趣も。縁也とあそ言
補さる意とを聞えぬ。斯て後。此職掌を定て。尚侍。典
侍。掌侍を別られぬ。尚侍ハ。ナイシノカ三。典侍を。ナイ
唱ふこと。禁中名。後宮職員令。尚侍二人。掌供奉。掌侍。奏
目抄よ見えと。後宮職員令。尚侍二人。掌供奉。掌侍。奏
請宣傳。檢按女孺兼知内外命婦。朝參及禁内禮式之事。典
侍四人。掌同尚侍。唯不得奏請宣傳。若无尚侍者。得奏請宣
傳。掌侍四人。掌同典侍。唯不得奏請宣傳。と見え。尚侍。典侍。

掌侍を。去^レて内侍と云ひ。其中より一内侍あり。此内侍を。當禁秘御抄に見たり。侍多^クちの常^ニ侍居^ル局を。内侍局とも。内侍所とも云ふ。御坐の神鏡也。此局御坐て内侍等の侍ひ仕奉る故也。御坐の神鏡と申あり。ま直は神鏡を内侍所とも申せり。さてしう内侍の仕奉る事。○善言美詞を。袁本を全^クこ^ト此縁よ^クることあり。○善言美詞を。袁加^カ斯^シ伎^キ言^{コト}。宇^ウ流^ル波^ハ志^シ伎^キ詞^{コト}を訓べし。此を本書に訓を闕と悦^エ懌^シとあるよ^ク就^テ新^ニ善言とハ。天皇命の大御心也。むはまかくを訓あり。むれ坐る時あど。其を休^ム免^ム奉^ルらむ爲^ニふ。態^ヲとをかしむ。ふ物言あどして。御心字と云^フ奉^ルるを云^フ。美詞を。其御怒^リ坐^ル候^ニ時あど。詞を美^クして。其字和^ク志^ス奉^ル。御心をと^リ奉^ル。れ^ヲを云^フ。○和^ハ君^ノ臣^ノ之間^ニと^テ天皇^ノの御心

子^カ應^ガざる事ありて。御臣とちの。大御前を憚^ハ畏^ルむと。の有^レ候^ニ時あど。其を取直^シ和^ク由^リ。○宸^ノ襟^ヲ。大御心と云^フ。言^ハ借^リまる漢字あり。美^ニ母^ノ能^ク於^テ母^ト比^トと訓べし。御物想^ハの義あり。け^テ大御心を悦^ビむと。上^ニ云^フ。如^クあ^リて。和^シ直^シ悦^ビし免^ム奉^ルる云^フ。但し此ハ今世云くと。大同の頃も内侍の内子仕奉^ル候^ニ状^ノ斯^ク在^リしことを知^レべし。然^ルを令^テ文^ヲよ^クハ^シ少^クも^クあ^リる。○善言美詞を。袁本を全^クこ^ト此縁よ^クることあり。○善言美詞を。袁加^カ斯^シ伎^キ言^{コト}。宇^ウ流^ル波^ハ志^シ伎^キ詞^{コト}を訓べし。此を本書に訓を闕と悦^エ懌^シとあるよ^ク就^テ新^ニ善言とハ。天皇命の大御心也。むはまかくを訓あり。け^テ内侍の仕奉^ル状^ヲ。如^ク此^ノよ^クて。其^ヲ大^ノ宮^ノ能^ク賣^ル命^ノ。此時然^リして。大御神也。御心をと^リ奉^ルる。れ^ヲらひ因^ルる。と^テ云^フ。其^ヲ證^ス。此^ノ神^ヲ申^シ祝^詞。大^ノ宮^ノ賣^ル命^ノ登^ル御^ノ名^ヲ申^ス。

事波皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氏參入罷出人能選比
所知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志古語云夜
波坐氏皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒
手襪懸伴緒乎手躡足躡古語云麻我比不令爲氏親王諸王諸臣
百官人等乎己乖乖不令在邪意穢心無久宮進米進宮勤
勤之米氏咎過在乎波見直志聞直坐氏平良氣久安良氣
久令仕奉坐爾依氏大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白
と何おの全文を神武天皇卷の本文小奉是小て御名
の義も御功のよやも知られぬおまむ凡て此意を彼処に注ふべしかく君と臣や此御間
取持ち侍ふふ徳比卓れて大お坐ぐ故も神祇官の八

柱の神比連おも祭られ給ひ但し此八神の中も此神を
とるよて其を貞観おどとりを後おるべく所も祭給予る事を後お加へはと朝廷
思ぬり其由ハ神武天皇卷も委くいふ思ぬり其由ハ神武天皇卷も委くいふはと朝廷
お仕奉る官人等ハ更おも云を交古くを末く此人まで
祭を飢して其御幸ひを祈白せるおと小おむ有る其
を兵範記小保元三年正月九日殿下宮咩祭如例右大臣
殿御方初有此儀云く家令大舍人允紀宗頼爲祝師と見
え伊呂波字類抄も宮咩祭正月十二月初午日院宮諸
家祭之とありこの諸家祭之とありよて誰も祭こと知し
拾芥抄小其祭文を載らるゑこと知其文小某年某月
壬午年加中仁月乎擇比月加中仁日乎擇比日加中仁時
乎擇天挂毛畏支宮咩五柱笠間乃廣前仁某恐美恐美毛

申給久。五柱とある心得がぬし。此を後子配祭まる神の。
四柱ありしよやさて笠間と申はこと未思得
べうおぼ物語固もおりの巻子つおのふとよ女此手よ
て今日おらむからうじて一お祈りおるひらでくぼて
おんれどりおぎおともたわびおひし笠間子神の
おやあるくおておと云くと云ひ実方家集お何米
お坐笠間の神のありおせおふりおし中をいりてと
たましと詠おどお決て此よ由ある事おらむを後人
よく考絹波乍編綿波乍結進物波高杯加彌高仁飯乃方
毛利加仁清酒乃早仁堅酒乃堅櫛乃忽仁餅乃持天榮仁。
鯛乃平仁鱒乃彌益々仁鯛乃好美好美仁鮑乃片罡仁蠣
乃搔寄天薺乃庭佐良須嚴久聞食受納給天壽長久身全
志天天地乃不祥内外乃惡事未萌以前仁兼天波遠久拂
比退介給天官爵如意仁叶志女給天萬世仁子孫繁昌門

止有志女夜乃守里日乃守里仁常磐堅磐仁守里幸戸給
閉止恐美恐美毛申須。此今井似閑方葉緯引る本
飯カカタカユと訓より和名抄子饅。是ふて其祭のさほ
加太加由とあり薺の訓はニハナウ。是ふて其祭のさほ
供進物おぞ此種も知らまよ。はて此祭文いと上れ
已し世の文と小見えおどむげよ下まる世の物とを見
えびまよ餘此祭文の例と比は思ふよ。お此おら文の
をうしげよ聞お依お所由ある事おるは。さて上件此
時を誰もよく祭らでハ得有まよ。死神お依今世おた
祭る人女をさく聞おる事おきハ。故事を尋ぬる人の
少き故おはて此神を祭る依社を神祇官の八神殿此外
おも神名式よ。造酒司坐大宮賣神社四座。並大月文徳天

皇紀。齊衡三年九月。造酒司酒甕神。此在宇迦之御魂神の

の神躰を根倉三カと云々。從五位下。大邑刀自。小邑刀自。

等。竝預春秋祭と有也。おれよ依まむ相殿よ坐三柱を酒

甕神大邑刀自小邑刀自と申よや

さて大宮賣命の造酒司よ祭らま給ふことハ大御心を

悦しめ仕奉人とし此手躰足躰おどほらせび侍をむめ

給ふ御功よ依。まと式也。丹後。因丹波郡。大宮賣神社二座

名神。貞觀元年正月。丹後。因從五位下。大宮賣神。從五位上。

と因史。小見也。まと式也。武藏。因埼王郡。宮目神社。おど

の也。おと稻荷神社也。注式。小下社。大宮女命。異本よ大宮

命婦田中社。中社。稻倉魂命。播百谷神也。一名豊宇氣姫命。○鍊胤

云谷を穀と同音の字故。お借て書。上社。猿田彦命とあるハ。とく事實よ符ひて。後

人のおしほる子。思寄るはむじき説あり。扱まと笠間と云

名よて祭まる也。式。小越前。因坂井郡。小笠間神社。加賀。因

石川郡。小笠間神社。大和。因宇陀郡。小笠間櫻寶神社。おど

のゆ。和名抄よ加賀。因石川郡。小笠間。加佐万と見也。笠間神

社此処あるは。常陸。因よ小笠間を云也。由は

る。さて此神は。かく太むき有功の神あるを。記紀共よ傳

洩しぬゆ。然るを拾遺也。其事蹟を傳。ぬゆを。おとれき賜

物ありら也。然るは下。第六十。小舉るが如く。是太王命。久

志備所生之神と有也。大宮能賣命は。案。小常。小殊。おゆ功

徳ある神。おゆ故也。其生坐る時。小久志備。おゆ祥有し。お

ゆ。何れゆ事の有し。傳。かくて久志備と云語。意は。

天照大御神の生坐し時ふ。伊邪那岐大神喜曰吾息雖多
未有如此靈異之兒也。詔ひ。丹後風土記。與謝郡郡家東
北隅。方有速石里。此里之海有
長大石前云。先名天梯立。後名久志備濱。然云者。因生大
神伊射奈藝命。天為通行。而梯作立。故云。天梯立神。御寢坐
間。伏仍怪久志備坐。故云。久志備濱云。と見え。はと皇美麻命。御天降の所。日
向襲之高千穗穗日。二上峰と有也。はと久士布流多氣と
も有れむ。クレビクシ
ブルと活用。是らを考合せて。久志備と云言。義をも辨
志。然れむ大宮能賣命と稱ふは。萬幡豐秋津比賣命。亦云
栲幡
千く比。此大御神の御前よ侍ひて。宮内の事取もち給へ
賣命。功を稱と亦名ふて。豊秋津比賣命。産靈神の御
子。ふ坐まりこと。上よ見たり。や
ぐて天宇受賣命よ我有る。其をまが上り記せる。大宮

賣命此事蹟を。よく讀み熟思ふべし。決然て宇受賣命あ
るべき事。狀りて。拾遺の傳に於て。きを思ふよも。天鈿女
命。其神强悍猛
固。故以為名。以眞辟葛為髮。以蘿葛為手繩。云々。令天手
力雄神引啓其扉。遷座新殿。則云々。令大宮賣神侍於御前。
如。今。世。内。侍。善。言。美。詞。和
君。臣。間。令。宸。襟。悅。懌。也。豐磐間戸命。櫛磐間戸命。二神守
衛殿門と有也。此文豐磐間戸。櫛磐間戸命。と申せるハ。石
戸別命の亦名あることを。心よ留おきて見る時ハ。是や
ぐて手力雄命。れはるく思得られ。其事情。ふ思ひ合せて。
大宮賣命。やぐて宇受賣命あるべし。とむのハ。誰も思
得おべき趣ありのし。然のみれらば大宮賣命の事蹟也。

悉く宇受賣命免きとる。まゝ宇受賣命を。然むの^サ太^{一三}じ
祀神を依り。其を祭ま^レ依社とて^レた。一^ニぬふ有ことあくて。
必此神を祭る^レ法き祭事ふ。大宮賣命を祭る^レあどを以
て曉^{サレ}法^シ。そを上より引とる。大殿祭の詞別、祝詞ま^ニ宮^一咩
るべき祭事^{祭文あどの状を思ふ}ふ。決めて宇受賣命を祭
あるをや。あや言を^レ書紀ふ。素戔鳴尊の既ふ高天原
を逐^ヤをきて後ふ。復上^レ給ふ處^ニ。天鈿女見^テ之^ヲ而告言^ス於
日神と見えある事蹟を。此ふ令^ニ大宮賣神侍^一於御前と^レあ
る事蹟ま^ニ此神よ白^レ祝詞^一。同殿能裏爾塞坐^{ウチ}氏^{サヤリ}參入^ル
罷出^レ人能選^レ比所知^レ志^一と云るあどふ思ひ合せて。御前ふ
侍ひ塞めて。參入罷出^ル人の選^レを掌^レる^レあ^ニと^一。必强悍

猛固ある宇受賣命あらで^レた。得勤^ユむま^ニじ^一き事を辨へ。宮
賣。宇受賣。同神ある事を思ひ決^サむ可^ク也。猶正^シく思決^サむ^レ法
第五十四段。天、宇受賣命の御名の出^ルと^レあ^ニり^一。又^ニ考^レ幡^一千^ニ
る處^ニ云^レり。此と合せて思ひ辨^レふ^レべ^シ。ちて又^ニ考^レ幡^一千^ニ
比賣命と。同神依^レべく^レ所^ニ思^レる^一由^ニ也^一。伊勢大御神の相殿
ふ坐ま^レび^二座^一の神を。内宮儀式^ニ。天手力男神。萬幡豐秋
津姫命也。と^レあ^ニる^一ハ正^キ説^ニあ^ニら^レ。此神等の相殿と^レあ^ニ給^レ
ず^レる^一也。豐受大神の外宮^ニ鎮座^シと^レあ^ニり^一此事^ニよ^レて。其
と^レめ^ニ以前^ニ也^一。此二神を合せて。御戸開神を申せ^レし神等^ニ依
^レ也。此等の事委^ク也。第百三十四段。此二柱^ニ神^一
者^ニ并^ニ祭^レ伊須受宮^一と^レあ^ニる^一處^ニ云^レを見^レべ^シ。其^ニ大神宮
本記^ニ。天照大神一座。相殿神二座。左天兒屋命。と^レあ^ニり^一て。
右天太玉命。

是亦いと正き傳あり。此事も別アケ御戸開闢神二座。天手
第百三十四段委く注べし。鎮座本記。鎮座傳記。鎮座次
力男神。栲幡千々姫神とあり。第記。神名祕書。鎮座本縁も
同此をあ。此傳や合せて考ふる。手力男神を御戸開神
と申て祭らむことを。石屋の戸を別開ワケあるへまを。然と
やある哉。栲幡千々姫命を宇受賣命と別御戸開神と申
て祭らむを。更う由あく。手力男神と共お祭て御戸
開神と申け可きは。必天。宇受賣命れるはきものあり。上
云ふ。説どもを考考。然まども栲幡千々姫命と云説れ。諸書
牙合せて曉べし。然まども栲幡千々姫命と云説れ。諸書
符と誤りとも所聞ぎはた。決然て宇受賣命宮。大と同神
あるはく所思ふ也。此おと委くハ第百三十四段御天
戸開之神也。とある處よ云べし。

石戸別命。櫛石窓命。豐石窓命。此段を都て。拾遺を取て記
依あまど。豐石窓。櫛石窓と申けを。石戸別命の亦名と爲
あるを。古事記よ據りてあり。まま此神やグて手力男命よ
傳ひ。石門別てふ名を。石屋戸段の時。天。石屋の戸を開き
分けとる意の如く聞ゆ。然まども此神は然る由をあしと
云ました。考れ。名義。櫛。豐ハ共よ例此稱名。窓は眞門の意
あるはし。窓と作るも。間戸と作るも。借字あり。○令守衛其殿門而。此を
彼新宮の御門を。守らせる由を。其を石屋戸を引開き
ぬ依功を。其はく負て仕奉らる。此因縁に依りて。此
神を御門神と祭るよとあり。其を古事記よ。石門別命。
亦謂レ櫛石窓命。此者御門神也。ままと拾遺神武天皇段に櫛
亦謂レ豐石窓命。

磐間戸神。豐磐間戸神。今御門、巫、所奉齋也。と見え。神名式に、神祇官

西院坐御門、巫祭神八座。並大月、次新嘗、櫛石窓、神。四面、門、各一座。豐石窓、

神。四面、門、各一座。とあるは是なり。櫛石窓、豐石窓と申、二名を二

抄、祭の故、ま、空、考て八座あり。清和天皇紀貞觀元年正月に、此二神に

從四位上を授け奉給ふ由見也。おれまでハ、無位ありき。四時祭式に、

五月十二月、四面御門祭。御門、巫、行、是、とあるに、此神の祭あり。

祝詞式に、其祝詞あり。其、大、殿、祭、の、次、上、に、奉、と、る、大、宮、費、命、に、白、以、祝、詞、あり、て、其、次、に、

載られ、とり、此、を、故、ある、と、あり、其、由、に、神、武、天、皇、卷、に、云、ふ、べ、し、其詞に、櫛磐牖、豐磐牖、

命登御名乎申事波。四方内外、御門爾。如湯津磐村、久塞、坐

氏。四方四角與利、踈備荒備來武天能麻我、都比登云神乃

言武惡事爾。相麻自許利相口會賜事無久。自上往波上護

利。自下往波下護利。待防掃却言排坐氏朝波。開門夕波、閉

門氏。參入罷出人名乎問所知志。咎過在乎波。神直備大直

備爾。見直聞直坐氏。平良氣久安良氣久。令奉仕賜故爾。豐

磐牖命。櫛磐牖命登御名乎稱辭竟奉久登白とあり。ま、と、祈、年、

祭、祝、詞、に、も、御、門、能、御、巫、能、稱、辭、竟、奉、皇、神、等、能、前、爾、白、久、

櫛、磐、間、門、命、豐、磐、間、門、命、登、御、名、者、白、氏、辭、竟、奉、者、四、方、能、

御、門、爾、湯、津、磐、村、能、如、塞、坐、氏、朝、者、御、門、開、奉、夕、者、御、門、開、

奉、氏、踈、夫、留、物、能、自、下、往、者、下、乎、守、自、上、往、者、上、乎、守、夜、能、

守、日、能、守、爾、守、奉、故、皇、御、孫、命、乃、宇、豆、乃、幣、帛、乎、去、此、時、

の功字本として、稱と依辭あるを以て。此神に御門を守

衛し、久と依に、禍津神等の入來て、まよ母禍事せむと

を思ひてぬる事、義を曉べし。又かく御門の開閉をさす
み。掌給へし故ふ。亦名を阿居太都命と申せるおと知
可し。此事上第四十九段天語連のけて神祇官、西院の外
ふも。神名式ふ。丹波、因多記郡。櫛石窓神社二座。並名と何
也。二座のうち一座を豊此社のおと。神祇伯顯廣王記ふ。
本官西院北舎坐、四面御門神。大内建禮建春門等令坐之
神也。本社在、但波、因令坐宮城門之上と見えぬれむ。御門
巫の祭る八座、神をもと丹波、因と也。御霊を分け移しぬ
るぬるゆ。此神の當因に鎮坐せる事、彼豊宇氣神の
比沼、麻奈井に鎮坐し縁に依まることお
るべし。丹後、因丹波郡に大宮賣神社あり。ふても然を思
をゆあり。まに櫛石窓神社の在る多紀郡に大賣神社

と云ぐ式に見えたるも、大宮賣神ふを何ら
ざるの尋べし。御社を寺内村と云ふ在とぞ。けて又式外
おまども。伊勢、大御神宮ふも。此神を祭らまよゆ。其を倭
姫命世記ふ。御門、神豐石窓、櫛石窓神。四至、神四十四と見
え。御鎮座傳記ふも。御門、神二座。豊石窓神、櫛石窓神と何ゆ。此を大
内と同じく。必祭に給ふべき謂おまよ。式外おにやて鹿畧
ふ思奉るべきおとふ非也。伊勢、神名祕書にも御門、神、豊
石窓、神、櫛石窓、神坐也。四至、神
四十四前宮中祭之、号式外、社也。無宝殿也。と見えて外宮
にも同じ坐にせし世記にも此書にも云るハ信よ然る
いまに清和天皇、紀貞觀元年五月ふ。山城、因天照御門、神
ふ。從五位下を授られしおと見也。此を天照大御神の御
門を守衛とるへる由
よて、稱とる御。まに神名式ふ。越前、因足羽郡。御門神社。能
名あるべし。

登、圀能登郡御門主比古神社。此二社も決免て石戸別命あるべし。大和、圀

高市郡天津石門別神社。此社也。清和天皇紀ふ。貞觀十七

年三月。授、大和、圀正五位下。天、石戸別神從四位下。と見也。

ま、と式よ。攝津、圀嶋下郡天石門別神社。此社也。今茨木村と云よ在。と帳考

ふ云。近江、圀伊香郡天石門別神社。陸奥、圀白川郡伊波止

和氣神社。此社也。仁明天皇紀。承和十年九月。奉、授、陸奥、圀

勲九等。石波止和氣神從五位下。と見也。神名帳頭注よ。陸奥、圀白川郡伊和

止和介、手力雄命、と云よ。ち、扱、ありて云。ま、と右、社よ、並、て。

都、古和氣神社。名神大仁明天皇紀ふ。承和八年正月。奉、授、

坐、陸奥、圀白河郡勲十等都、古和氣神從五位下。同三月

授、從五位上。と見也。ま、と式よ。同郡よ。石都、古和氣神社

と云も、何、也。上、ある都、古和氣神社也。圀の一宮よ。當

圀の事を記せる。觀迹聞老志と云ものふ。都、古和氣神

社、關山明神乃、是也。往時關山去、今、新宮東、可、二里。松杉鬱

鬱、峙、于、白河城外、驛口。今、社地、在、白坂、奥野之疆、建、兩社、以、

爲、關山神、といへ也。關と云、名よ、負、白河、關あり。是、ふ、と、りて、按、ふ、都、

古和氣神社を申、候、も、決、て、石戸別神ある、は、く、お、ぼ、也。一、宮

記、ま、と、神名帳頭注よ。味鋸高彦根、神とせる、を、例の信、と、し。は、依、を、此郡ふ。伊波止和

氣神社、ある、と、い、ハ、必、關守、謂、よ、と、る、事、を、依、は、々、ま、也。

此御社、ある、と、一、宮、を、坐、て、關神と申、候、べき、也。然、を、非、で、都

都古和氣神社を。一宮と申し。關山明神とさす申す。然
を推量らるゝ。あす。然まむ石都古和氣神社も。同神あ
依べき。あすと。推すて知るし。石都古和氣と云ひ。都古
まよ。記し傳。とる。あらむ。唱へ誤。あり。む。其。唱へ。の。ま
國伊波氏別命神社の。光仁天皇紀。寶龜十一年十二月此
處。鎮守副將軍百濟王俊哲等。賊小園まし時。右の神多
ちふ祈す。神力を蒙すし。依て。幣社。預らむ事。茂請
申し。う。む。許し給へ。ゆ。あ。と。見也。ま。と。東。鑑。よ。文。治。五。年。七。月。白。河。關。を。越。て。關
明神。奉幣。せ。ら。ま。し。事。あ。す。其。あ。と。式。ふ。美。作。國。英。多。郡。
を。泰。衡。を。征。と。き。の。あ。と。あ。り。き。あ。と。式。ふ。美。作。國。英。多。郡。
天。石。門。別。神。社。あ。は。社。を。清。和。天。皇。紀。よ。貞。觀。五。年。五。月。美

作。國。從。五。位。下。天。石。門。別。神。授。從。五。位。上。と。見。也。此。社。を。今
地。早。瀧。と。云。ま。在。又。式。ふ。備。前。國。御。野。郡。石。門。別。神。社。當。國
と。帳。考。ふ。い。へ。ゆ。社。考。よ。今。田。住。村。石。門。別。神。社。當。國。の。式。社。考。よ。大。供。村。と
と。云。ふ。在。と。云。す。石。門。別。神。社。い。ふ。ま。在。て。戸。隱。宮。と。稱。は
せ。い。す。り。戸。隱。と。い。ふ。た。手。力。男。清。和。天。皇。紀。よ。貞。觀。五。年
神。と。云。古。傳。の。存。れ。る。あ。依。べ。し。清。和。天。皇。紀。よ。貞。觀。五。年
安。藝。國。正。六。位。上。天。磐。門。別。神。ふ。從。五。位。下。を。授。け。ら。れ。し
あ。と。此。神。社。い。づ。あ。ま。同。七。年。よ。太。政。大。臣。東。京。第。天。石。戸
在。り。尋。ぬ。べ。し。開。神。ふ。從。三。位。を。授。ま。ら。ま。し。事。あ。ど。見。也。あ。の。石。戸。開。字
御。戸。開。神。の。開。字。ア。ケ。と。訓。む。べ。き。こ。と。ま。ま。と。式。ふ。土
石。戸。別。此。別。を。開。の。意。あ。る。由。を。も。曉。る。べ。し。ま。ま。と。式。ふ。土
佐。國。吾。川。郡。天。石。門。別。安。國。王。神。社。印。本。王。字。の。下。よ。主。天
校。合。と。る。古。本。三。よ。ま。ゆ。於。上。田。百。樹。云。今。ま。と。云。も。あ。す。
國。王。と。此。み。云。て。王。主。と。を。い。は。は。と。云。ゆ。

此を石屋戸を開さるる依て天も固も照明め安はと伊
らりまあまゝるあどの意を以て称する御名不や
豆圀加茂郡伊波氏別命神社伊豆志君沢郡梅名村
石戸別又名櫛石窓亦神石窓此御門之神也
内明神といふ上梁文も賀茂郡田方莊梅名村
三島大社より迂去を以て祠地のみ賀茂郡と
大社の例此如きりと云り大社と伊豆三島
とあり伊波氏別神社の三島神社より事第
一段子委く云り隣郡田方郡小劔刀石床別
一あり此も同神あらむそを石床と下小劔
神社の石座と同義ふ聞ゆまはあり伊豆志
谷田村も坐て日本武等と云ま御嶽權現と云
下宮とも申と云りさて劔刀を石の波奥の
辞うまとは是も就て思ふ上子挙る陸奥の
都古和気神社の石都古志石床を訛る野村八
伊波久良和氣命神社伊豆志郡八幡野村八幡宮
して本宮あり木宮を古老相傳て伊波久良和氣
今を二宮丸正祭のとき酒を竹筒に盛りて伊古奈比

神社まおくる礼ありと云り伊古奈比咩神社も式
郡ふ載らまよりさて伊波久良和氣神社の彼社
ること此も第百三田方郡引手力命神社伊豆志
十一段子云べし引手力命神社伊豆志郡引手
引手力雄山ありて社ありをど正場と云あり
あし坂といふをど正字為て祭りし処云引手
命と石戸を引開と那賀郡石倉命神社伊豆志
る由の御名あるべし那賀郡石倉命神社伊豆志
滋賀郡石坐神社若狭遠敷郡石鞍比古神社石
比賣神社並て石越前大野郡石鞍比古神社能登
至郡石倉比古神社おど石鞍比古神社能登同
あとあり其を参河圀丸石座神社を文徳天皇紀
天皇紀れども石鞍と作るひきあぞ有正此圀
石戸別命ふ由る社の殊も多うまむ四社共石戸別
命あるはし中伊波氏別神社は上梁文も天石戸別
れり其由縁ある社とも伊豆三島神社阿波命神社

伊古奈比咩命神社亦是也。阿波命を石戸別命の御

后み坐ままし伊古奈比咩命ハ三島神の後の后の坐ますまと式

尾張国中嶋郡石刀神社石見国那賀郡大祭天石門彦

神社亦ど何也。此石門彦神の鎮坐は郡を那賀と云を思

正移せるふを何らじりて大祭と云いりある意あら

む思ひ得は信友を此国の大某を云地名多るまだ大祭

と云意もやと云。○大殿祭御門祭供奉矣を古語拾遺小

殿祭門祭者元太王命供奉之儀齋部氏之所職也云くと

何るよ依りて記せ也。○故天宇受賣命者御巫猿女君等

出祖也。亦れも拾遺小。○天石門別神此神者御門之神也。

亦古事記小。天石戸別神。亦名謂櫛石窓神。此神者御門

之神也。と有るよ依りて記せる也。但し御門の開閉を掌

事を見て。○阿居太都命天背男命。去を亦名と定ふる由

を姓氏録左京小縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命

之後也と見え。此傳は八世孫と何るを誤あり。あらふ孫

大れ小並はたて。大掠置始連縣犬養同祖阿居太都命之後

也と云ひ。今木連神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命之後也

を云ふを。此もあらふ孫と有べきを五世孫とある。まと

巨掠連今木連同祖といひ。大掠置始と云は中臣殖粟物

部弓削亦と云類は宮部造天壁立命子天背男命之後也。

て大掠の復姓あり。宮部造天壁立命子天背男命之後也。

をも云ふを合考ふるよ。大掠今木宮部を同祖よて天壁

立命と云るを。天底立命あるを灼く。ソコカベ同義あり。委く辨とるを見るべし。まに神宮部造合せ考。阿居太都命。天背男命同神あると。天壁立命子。天背男命と。阿居太都命。阿居太都と申を以て。天手力男命。亦名天石の亦名ありと。知られぬ也。故縣犬養宿禰條。神靈命。今木連條。神魂命。五世孫阿麻乃西乎乃命と云。五世八世共誤。おて。あ。孫とあるべきものあり。と云。其を此神。大御神の刺隱坐。石屋戸を開ぬ。了。功績。依りて。彼新宮。此御門を守護也。其開闔字掌。給。ひ。あ。の由。上。の御門祭の詞。字。あ。の因縁。よ。りて。御裔。此大伴氏。佐伯氏。御門の開闔字掌。と。し。う。也。此事第百三十七段。

天押日命の下。此神の御名。かく負坐。む。也。然る事。委く云を見。あ。り。ぬ。○犬養。あ。を。姓。氏。録。攝。津。国。天。神。系。多。米。連。神。魂。命。五。世。孫。五。世。を。三。世。の。誤。あ。る。天。比。和。志。命。之。後。也。と。阿。依。條。の。次。ふ。犬。養。同。神。神。魂。命。を。云。ふ。十。九。世。孫。田。根。連。之。後。也。と。阿。る。よ。依。て。記。せ。り。さ。て。犬。養。と。を。犬。を。養。ひ。走。し。て。獵。を。爲。依。職。號。也。姓。ふ。あ。ま。る。あ。依。る。し。其。高。野。天。皇。紀。天。平。馬。養。造。人。上。祖。以。能。養。馬。仕。上。宮。大。子。被。任。馬。司。庚。午。籍。編。馬。養。造。云。く。と。阿。る。よ。准。へ。て。知。る。也。○縣。犬。養。宿。禰。此。を。姓。氏。録。左。京。了。縣。犬。養。宿。禰。神。魂。命。八。世。孫。阿。居。太。都。命。之。後。也。と。有。よ。依。て。記。せ。也。但。し。八。世。孫。と。阿。る。こと。上。上。ふ。舉。と。る。犬。養。氏。の。條。あ。る。田。根。連。也。阿。居。太。ふ。云。り。き。

故天照大御神出坐天石屋戸

都命の裔あること也。上引る文よ。天語連縣犬養同祖。天日鷲命之後也。と何ゆよて著く。田根連と云る也。未を云ひ。阿居太都命をいへる也。本を舉る也。故此姓を天日鷲命の裔として此けて此姓を元は犬養と比み稱けむを御縣に居ぬゆし故ふ。縣犬養とハ云あらむ。天武天皇紀よ。十三年。縣犬養連賜姓曰宿禰也。然を此とゆ前ふ也。連の加婆禰ふて有しあり。是よ就て思へむ。犬養部の群主とありし職号をやがて戸とた為さるあり。あふ固史ふ。神龜四年十二月の処。まると宝龜二年九月の処。あども。此氏人のあると見ゆ合せ考べし。

出時。天原及天下。自得照明而。

八百萬神衆俱相見。面皆明白。

矣。爾伸手而歌舞。相與稱曰阿。

波禮。阿那於茂志呂。阿那多能。

志。阿那佐夜憩。飲憩矣。此者大。

直會出事本也。

ナホラヘノコトノモトナリ

自得照明而之。於能豆加良氏理阿加理氏と訓法し。故と
まで古事記 けて大御神の出御るは。やぐて禍事此直れ
るあるに依て。火産靈神此徳も。本の如く炫乃止しれ也。
第四十三段終の処に記せる。或人。○面皆明白矣。おまを
此問に答。この説を合せ考ふべし。○面皆明白矣。おまを
云く矣。まで拾 明白矣は。志留加理伎と訓法し。おぼろふ
遺多取ま也。 燭を燃して。相見と依むの也。此。髪髯かめし神の面輪の。
みち炳焉く見えぬる由あり。○伸手而歌舞を。歡喜此餘
也。神ぬち皆起て舞ふれ也。○相與稱曰とは。八百万神

ぬち諸與子。聲をうち舉て謠する由あり。○阿波禮を。師
説ふ。見る物。きく物。ふはく事。心の感きて出る。歎息此
聲よて。今俗にも。ア、や云ひ。ハレ。や云。是ふて。譬を月花
ア、見事お花じやハレ。此ア、やハレと重と依もの
とい月うれと云。是あり。此ア、やハレと重と依もの
あり。此を後世にむ。ぬち悲き事をのみ云て。哀字をうき
む。哀の心もハ限らぬあり。万葉に。阿波禮に。何れあど
書とまど。此も。一方に。おきて書るもの。ふて。阿波禮
此義理を尽。阿那と云ひ。阿夜といふ。阿女同じ。はと波夜
とも。波母とも云ふ。波も。波禮の波も同じ。仁賢紀に。吾夫
我因摩播耶と見え。皇極紀に。咄嗟あどを。阿夜と訓るも
て知ばし。ま漢文に。嗚乎。于嗟れ。どの字を。阿くや訓こ
と多し。おの阿く。此の歌に。阿波禮。阿那と重祿て云るも。
も同じ。歎色あり。此の歌に。阿波禮。阿那と重祿て云るも。

歎息^{ナゲキ}此詞ある故^レ也。然^レ依^レを本書^ミ。阿波禮言^{天晴也}。天晴也。と
學者此注^ミ。ま^とひて。阿波禮ハ天晴の意^と。お思^ヒひそ^と。
ま^と後^世。世^も。阿波禮の波^を。音^便。和^やい^へど^も。古^を
か^やう^の。処^も。お^も。本^音。此^ハ。ま^と。ハ^も。じ^を。葉^齒。お^どの
如^く。唱^へし^る。殊^に。此^ハ。阿波禮^と。云^言。は^は。歎^く。芭^み。て^ア
ア^と。ハ^レ。と^の。重^り。と^る。お^れ。む^更。あ^り。拾^遺。阿波禮^を
言^{天晴也}。云^云。ハ^ハ。太^じ。き^非。言^れ。ま^ど。も^是。お^て。も^その
か^み。ハ^レ。を^晴。此^ハ。如^く。唱^へし^る。お^と。を^知。べ^し。ま^と。俗^か
よ^{天晴}。とい^ふ。詞^を。お^の。阿波禮^を。お^た。然^て。云^{あり}。か^く
て古^歌。阿波禮^を。詠^米。る^を。古^事。記^ふ。倭建命^の。御^歌。ふ。
一^ツ。松^{阿波禮}。書^紀。了^{聖德太子}。此^{御歌}。旅^人。阿波禮^也。此^外
思^ひ。妻^{阿波禮}。ま^と。影^姫。阿波禮^を。お^ど。云^云。哥^も。同^じ。詠^う。と^{あり}。是^ら。後^世。の^意。を^も。て
思^ふ。だ^其。を^{阿波禮}。お^思。ふ^と。云^意。お^聞。ゆ^ま。ど^も。上^古。の
意^ハ。然^ら。び^共。う^歎。辭^み。して^一。松^を。や^旅。人^を。や^と。云^ふ

同^じ。倭^建。命^の。吾^妻。者^耶。と^詔。ひ^ま。ま^と。万^葉。ふ^{阿波禮}。そ
此^鳥。吾^子。は^も。阿波禮^を。お^詠。る^を。言^う。と^此。み^少。し^異。れ
ま^ど。意^を。右^ふ。同^く。お^の。万^葉。の^二。首^共。ふ^文。字^を。い^お。ま
播^耶。と^訓。依^も。て^{阿波禮}。も^歎。感^{じて}。直^ふ。ア^ハ。レ^を。歎^き
と^依。ま^く。残^い。へ^依。ふ^て。此^詞。の^本。お^也。阿^波。禮^を。お^げ。き^阿
波^禮。の^お。う^と。過^し。お^る。然^る。を^依。は^て。詞^の。用^ひ。う^と。も。
う^お。れ^ど。の^類。も^同。じ^也。然^る。を^依。は^て。詞^の。用^ひ。う^と。も。
世^く。お^轉。び^て。本^此。意^と。を^違。ひ^お。く^お。と^多。き^物。う^て。お
の^歎。息^此。詞^も。後^う。を^さ。は^ぐ。ふ^用。ひ^て。其^用。ひ^状。お^依
て^也。意^も。異^あ。る^が。如^く。聞^ゆ。依^も。阿^ゆ。其^を。ま^お。万^葉。十
八^ふ。郭^子。此^鳴。を^知。て^詠。る^長。歌^も。う^ち。れ^げ。き^阿。を^ま

の鳥といふ時あり。此を去る。此後の詠方ヨミガタ似たり。前
おひく歌ウタの言コトのことと異カれ。其故そのことは、上代の
を旅ツリ人ひとの心こころを感あはれし。其鳥その鳥の如ごとく、是も同おなく、其鳥
と心こころを感あはれし。其鳥その鳥の如ごとく、是も同おなく、其鳥
あり。然しかし、此この鳥鳥と云いふ。其鳥その鳥の如ごとく、是も同おなく、其鳥
巴ヒメて、然しかし、此この鳥鳥と云いふ。其鳥その鳥の如ごとく、是も同おなく、其鳥
指さして、然しかし、此この鳥鳥と云いふ。其鳥その鳥の如ごとく、是も同おなく、其鳥
把つかす。然しかし、此この鳥鳥と云いふ。其鳥その鳥の如ごとく、是も同おなく、其鳥
く。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
歎なげむ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
咲さく。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
此この心こころ。他ほかの心こころ。阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
を思おもふ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
おひく。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
拾遺集拾遺集に、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
いはぬ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同

といふと云。阿波禮アハレと見也。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
牙はる。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
とぞ見みる。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
礼れいを歎なげむ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
ぞ思おもふ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
此も阿波禮アハレと云いふ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
みお其物そのもの。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
を忘わすれ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
阿波禮アハレを見。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
る。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
はを名なづ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
阿波禮アハレと云いふ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同
を之これ。心こころの内うちに、阿波禮アハレと云いふ。古今集古今集に、阿波禮アハレと云いふ。此も同

の深く感づること云あり。まゝ物をたれぶといふ
るまとお正。古今集に霞をたれびや有をのみ阿波礼
と心得とまども然ふ非び凡て嬉ぢとも残りしとも樂
まぢも哀しと女恋しとも情に感じてアハレをむれも
アハレと思むる事のみ阿波礼あり。ちまむれも
ろき事をのち死事れぢをも阿波禮と云牙依去と多し。
此ふ神等此阿波禮阿那於母志呂也。歌ひあるよて知る
はし。又物語文あどよも阿波禮ををかぢう。阿波禮ふ
まぢうあぢく連けて云牙正。伊勢物語に此男人の困
とれもしろく吹て。色ををうあうてぞ阿波礼に謠ひけ
る。とある。笛をおもあろく吹て。宇氣ふ色のをのぢき
阿波礼あり。蜻蛉日記に。おれをぢうぬあぢちも阿波礼
よ。うれぢう覚ゆること限りあし。是まと心ぢきて。嬉し
きあとも阿波礼と云り。但し源氏物語れど。其外も物語書よを。か
波礼と云り。

あぢと阿波禮あるとを。反對ふして云る事も多し。此を
總ていふを。別て云を。此異にあり。總て云牙ば。をかし死
も。阿波禮の中ふあもまゐるあ。と。右よ云は。如し。別てい
牙ぢ。人情にさほく。ふ感く中ふ。をかしき事。嬉しきあ
とあぢふ。感くこと淺し。悲し死こと。戀あきあ。憂死
事。あぢて心よ思ふ。叶をぬあぢふは。感くことあ。れ
く。深し。故ふそ。深き方を。取わきて。も。阿波禮を云あ。と
有あ。俗よ。悲哀をのみ阿波礼。譬へむ。總て。木草に花を
多る中よ。櫻をと。分て。花と云て。梅よも。對あ。依。如
し。源氏若菜。卷ふ。梅花を。花のさ。りゆ。ふ。あ。ら。へ。て。見。む。や。
と云る。こ。ま。れ。り。梅。花。も。花。あ。れ。ど。も。其。よ。對。へ。て。も。櫻

を取已けて然きむ阿波禮を云ことを情の中此一物
花といへり。然きむ阿波禮を云ことを情の中此一物
ちて云を。取已死ていふ末のおやふ。其本字云牙を。總
て人情の事ふぬきて感くを。こゝ阿波禮を云。故に人情
此深く感べき事を總て物此阿波禮と云れ也。物
と云俗に多し善事のみ云然きども。おまも然ら
字書ふ感動也と云て心れうごくおやふれむ善事
れ惡事ふまき心の動きてアハレと思はる。はこ
感るふてアハレと云詞ふとく當まる文字れ也。漢文
了。鬼神と有て古今集の眞名序も然書れとるを假
各序もむおよみをも阿波禮と思はせと書きぬるを
てアハレを物お感るこを依を知べし。大凡阿波禮
と云言の本まと轉りて用ひとるやあど上件よて心
得べし。まよ物のアハレと云も同じこを物と云む
言を物いふ語依を物おとるまよ物まうで物見物いみ
あど云類の物よてひろくはて我れ。物の阿波禮を知る
いふときお添る詞あり。

と云ひ。知らぬと云差別を。譬へば終でぬ花を見さや
のれる月お向ひて。阿波禮と情の感く。即ち物此阿波
禮を知依あり。おまその月花此阿波禮ある趣きを心
れるおまむきを辨り知らぬ人むいふあどとき花を
見ても皎々ある月お向ひても感くおとあし。是れを
ち物の阿波禮。月花れみお非也。總て世中お阿波とある
事おふきて。其趣き心ば牙を。辨へ知て。うれしかるは
き事を嬉く。をのしかるべき事は可笑く。悲くるべき事
は悲く。戀しかるはき事を戀とく。其くお情の感くが。物
此阿波禮を知まらる。其を何とも思はぬ。情此感かぬ
はまば物の阿波禮を知る。残心ある人と云ひ。知らぬを。

心形き人と云ふ也

西行法師の心あき身も阿波礼を知らむなり。鳴とつ沢の秋は夕ぐま。

此上、句も事あるべし。○今云、此を法師を去て君親妻を捨て、樹下石上をさす所とせ、清く世情を離るるを専と為さるもの故に、阿波礼を知らぬ人あり、その阿波礼知らぬ身も阿波礼を知らぬと訓る也。

伊勢物語ふむかし、男有け也、女をとかく云ふや月

日るふら也。岩木よし非祢む。心ぐ遠しやや思ひなむ。や

うく阿波禮と思ひら也。是ふて、物の阿波禮を知ると

云ふ味を^{ワケ}知はし。さて物の阿波禮を知るとめ。歌を^{イデク}出来

ぬ物あり。古今集よ、古歌献也し時の目錄は長哥を熟読

るが、の哥を悉く一の物に阿波礼をり出来たりと云

意を詠とて、四季と恋雜との間、年ごとふ時よけ

お、阿波礼てふおや云お、や言れと、其前後の四季

恋雜の哥を、これ時よつけお、出来ぬる哥どもありと

云義ふて、其物の阿波礼の品々を、目錄ふ後撰集ふ。阿る

詠とる長歌あり、心を著て読見るべし。

所もて、此前ふかきされ物がと也し侍、な依を聞て、内

を也女の聲もて、阿やとく。物に阿波禮志也、ぐ不れる翁

加あ。と云を聞て、貫之、阿波禮てふ言ふしるを無きと

も。言でええこそ、阿らぬ物あり。此詞書よ、阿やしく物の

云ふは、貫之あるよとを知て、哥をみ良お也と云事を、お

不、何の益もあら、返答も其意を得て、哥をみたりと

阿らぬ物ぞといふ下心あり、阿波礼に堪ぬ時を、まて

る也、彼物に感じ、土佐日記ふ、もろおしも此方も、おもふ

事ふぬへぬと死の己ざと。や歌をむ事を云るれど、ふ

て知はし。と阿也。此を玉の小櫛と、石上私淑言と、ふ言を

れ不引哥あどのこと。即此の神等也。諸聲ふ歌ひ出給
私淑言ふ委く見えたり。大御神の久しく刺幽居るを甚く憂ひ坐
了。千ぢふ心を碎き謀ぢ給るに如く出御して。本の
おと照明也。各々某々。面輪も炳焉く見え別也。阿波
歡喜ふ堪び起舞ひ。言はでえおそ在られ交ふ。阿波
禮や歌ひ舉給ふはこと。然有べき事ふあむ。○阿那於茂
志呂。おを本書注ふ。古語事之甚切皆稱阿那。一本は甚を
も非の言衆面白也とあり。阿那るふ言義也。此注ふ云
るが如し。其を委くも。第六段ふ注也。阿那逆夜志の処見
阿夜惶根神此下。於茂志呂も。本注ふ云。牙る如くあまど。
をも合せ考べし。於茂志呂も。本注ふ云。牙る如くあまど。

黑白と對言ふ白の意よを非交。此ハ師説ふ。阿ざやうふ。
とく分ることぞふて。と不志ろし。やある志ろしも。察明り
能九分はあと。まよ御火白く焼け。と云へ依。今云。此は古
次第ふ人、長の主殿寮。今ある言ふ御火白久献礼。まよ
と見也。即阿ざやうふ明く火を焼け。と云ふあり。まよ
軍書おぞよ。矢を射抜きて。鏃の著ハま出ぬるを。矢ぞ也
白くれど云ぬふ同じと有也。此七里繁民が師説をき
が本は書入とてしを其俣あ。よ注せるあ。けて齋明紀
り。此段師説と云る注を。これそまあり。けて齋明紀
ふ。建王の薨ませる時の大御歌ふ。今城ある乎武例が上
よ雲ぬふも。旨屢俱之多。婆。屢今本は居と作也。何の嘆
の年。万葉よも雲谷灼発。此御歌の旨屢俱。やがて此の志
ととある哥あり。

呂と同じく。伊知自流斯の志流ふて。灼死由なれむ。於母
志留せ有げきを。志呂とあるを。後此とあす此儘不記し
傳とる。本を正志留せも志呂せも言るふや。ま此の
白の白此意ふハ何ら祿と黒白 此白も本を同言あるべくあそ。ま同紀よ。同王を葬奉
ま。今城の地を詠ませる大御歌ふ。山踰て海わと依と
も於母之樓枳。今城の内をわは死もまじよ。とある於母
之樓を。此の於茂志呂と全同言あるを。前の御歌ふ。雲だ
ふも灼し立渡と詠ませ依と合せ按ふふ。雲此立を御覽
て。御子を慰び給ふ御心を。慰給ふ由よて。後世よお
安ろしと云依ふ似とるを。此の於茂志呂を。漸ふかく

も活用するあすれぬ。師説よ。此於母之樓枳今城のうち
ろと詠給へり。さま此言を心の深くあむ意よて。哀樂
よろくをらび言が古意ありとて。本書よ面明白也と云
る注を俗意ありと言をし由右よ云る書入不見えとま
ど廣成主の心も黒白の白此意ふて非故本文よも注
ふもあふ白とを書明字を添て書まとり。然るを師を
本ふ明白は。レロレと假名を付とるを此み心ヲ雷らま
志よや。此後人の己さあるをや。○清濁考よ。オモレ口
レとを心ヲ挂るやうの事ありと何正。今云。あの大御哥
の於母之樓枳をオモレルキと訓べき。今云。あの大御哥
も。万葉十四。於毛思路伎をあるふ依て。レ口と訓り。侍
て此を。今まで常聞ふして。燭を燃しとるを。かみよてを。
猶お不く。とく。分難かすし神等此面の。大御神の出御
と共ふ。明白く見えあるよ。各く相見て。お不えは阿那面
明白と歌ひ給へ。事とぞ思ハる。今世よも思不えは
終おらしき物を見

この時おどよみ於夜云くと言ひ出ること有るを此心ぞ
有り前ふ阿那と阿夜を同言よて驚きて嘆く色あり
かくて俗は驚の色を於夜といふ言の阿那多
即是ありと云るを此は思ひ合せて辨ふべし。○阿那多
能志おも本書注ふ言伸手而舞今指樂事謂多能志此意
也と阿正言れ義を信ふ如此くあらむ。但し多能志を
多怒志や有べき古言れ格あるを能と阿るを。後の言習
の儘に記し傳ふる。万葉よ多怒志を阿正。ま古能
を怒と云ること多加まむ古くハ能。万葉緯に舉ふる内
志やも怒志やも二於よ云るふや。侍所御神樂式に採物の篠歌に篠乃葉爾雪布理川毛留
冬乃夜爾豐乃安會比乎須留我手伸左と樂ふ手伸と書
るまとも由あ正てお不也。義と志於る本書注を附會よ

て甚俗意ありと言ましとぞ此を然も有あむ。ちまど
餘よ思ひ得ると説のあれば姑く本書の注よ從ひて
ありけり憂ふる事此有るを自然に體に屈みて伸やう
飢ら怒あくちに依を結滞ぬ依心もとけ其憂のとみよ
晴てをその歡喜に堪えて阿く波禮やうといひ其情の感
く餘正ふ手を伸て舞ふことよまま自然に眞情ふて
阿那多能志やをままで屈みぬ正し手も伸やうよあ
れる由あるはし。斯て多能志をもや其立舞ふ状を云る
體語に依殘後ふを麻美年の辭を添て多能志美多能志
牟多能志麻牟と活用しぬ依ふて多能志美と云を其用
語のまに體語をあむるあらむ。かく本の體語を用語
よ活用ひそれ用語を

まゝと躰語しとる。此言の義お不熟考ふべし。○阿那佐サ語ども甚多り。夜ヤ憇ケたを信友本カに書入る。長谷川菅緒と云人の説す。本註ふ。竹葉之聲也と。何るを非説ふ。佐夜憇ケた。肥前風土記よ。分明謂フ。佐夜氣志トとあはれ是分明字此意ふ。明おる意お。天照大御神の。岩屋戸残出給ひて。世間ヨのさや加ふ不明けくれまる由お。と云る此説信コト然る事ふ。阿那と云ふ發語何依よても明サ此意とを知らまぬ。然るを師を記傳も右の聞書も竹葉のそとぎてさやさや去ることあり篠比葉も山もさやお古り用ひ來れども發語の阿那きおえび神樂也。昔ハ神樂此とき言しありと言れしを佐夜神。佐夜加おどる哥も詠ことおいましてり心著れざりしれりかくて發語の阿那きおえぬと言ましは疑ふべき

注を信じて疑ふまじき古語を疑むまじとるまじぞありぬ。ちて阿那ア於オ茂志モ呂ロを神等此御面此炳レ焉レ見えぬ依を歡べる詞おの阿那ア佐夜サ憇ケた。世間サの分明カおあれる字喜ばるおまむ。共も明アおる由おたあまど。彼を神等の面を云ひ。此は廣く世間おのく詞お。○飫憇オたまば師云古語拾遺。以ヲ飫憇オ木葉ハ爲シ手草トと有て。飫憇ハ振ル其葉之調也と云るおと疑はし。神樂歌古本ふ。於オ介ケと唱るおとを處くお見えぬまむ。此言を古傳おるばし。然れども此を木名とせるを心得ぬ。ちる木を古も今もいはど聞え。或説ふ。賢木ありとも。檜量りの妄説ふ。又木葉を振音のオケを鳴べき謂ふ。ちて其證おし。

まむ此を木名と云ふ。かの小竹葉の音此。非説あるは
し。凡て同。処子云。阿波礼於茂志呂多能志あどの説も
こ。古言の意。非。或。後。人の附會れるを辨へ
あて。記せる物あり。○今云。此師説此中。阿波礼此注を
非と云れ。然ること。あ。於。茂志呂多能志の注を
然も有まじき由。故思ふ。於介と云。上。見。え。多。汗。氣。の
を。上。ふ。云。り。地。故。思。ふ。於。介。と。云。上。見。え。多。汗。氣。の
ま。ま。を。神。樂。ふ。か。く。唱。へ。し。を。木。名。を。誤。ま。る。あ。る。は。し。
憇。字。竹。葉。之。色。也。と。云。る。た。さ。や。ノ。と。鳴。や。有。也。古。本。催
依。声。と。出。ぬ。る。言。あ。れ。ば。ち。も。有。は。し。馬。樂。子。
オケ。オケ。ヤ。ア。ハ。レ。ハ。レ。ソ。ヨ。ヤ。ソ。ヨ。サ。サ。○後。按。ふ。神。樂
ヤ。あ。ど。云。言。も。見。也。あ。ち。と。く。考。ふ。は。し。
譜。ふ。そ。の。舞。を。本。末。ふ。て。稱。美。る。詞。ふ。阿。知。女。於。介。阿。知。女
於。介。と。云。ふ。殘。舊。説。子。阿。知。女。云。宇。受。賣。と。云。こ。を。あ。め。と
説。了。た。然。る。言。あ。ま。む。於。介。て。ふ。詞。を。説。得。げ。る。を。伴。信。友

が考ふ。古事記ふ。意。都。命。と。云。る。を。日本紀ふ。姥。津。命。と
阿。知。女。云。伊。呂。波。字。類。抄。了。獲。を。オケ。ザ。ル。と。訓。ぬ。る。字。思。ふ。ふ。
阿。知。女。云。宇。受。賣。と。云。言。ふ。て。宇。受。賣。獲。を。云。て。稱。美。ぬ。る
詞。あ。ゆ。ぐ。宇。受。賣。於。介。を。云。ひ。て。た。埋。免。置。け。と。云。ふ。如。く
聞。ゆ。る。故。ふ。阿。知。女。と。云。替。と。依。あ。ら。む。を。云。ゆ。此。説。然。依
は。し。教。子。あ。る。越。後。困。人。樋。口。英。哲。云。く。我。が。越。後。ふ。て。風
俗。歌。う。ぬ。ひ。て。舞。踊。り。あ。ど。依。る。を。ヂ。ン。ク。ラ。ド。リ。と
云。也。此。を。隣。国。ふ。も。有。ゆ。て。誰。も。と。く。知。ま。る。事。あり。然。る
ふ。其。上。手。あ。る。を。稱。て。オケ。サ。と。云。也。其。を。わ。が。郷。の。を。む。
柏。寄。あ。ま。バ。柏。寄。オケ。サ。と。い。ひ。三。條。あ。る。を。三。條。オケ。サ。
新。写。れ。る。を。む。新。写。オケ。サ。と。い。ひ。三。條。あ。る。を。三。條。オケ。サ。
云。何。ま。ど。も。上。手。を。不。む。依。意。を。同。じ。か。く。て。此。オケ。サ。と
依。者。あ。し。然。る。を。今。師。説。を。承。賜。を。る。小。彼。踊。ま。る。状。の。知。ま
ぞ。可。笑。く。宮。風。と。依。ぐ。宇。受。賣。命。の。御。有。状。子。似。と。り。と。美

る言れりとを始於て思ひ得侍り歟と云
○大直會は大
言也これ信ふ古言の遺を依ふる也
直ゆ饗ふる也然依は是時大御神の隱坐て世中常闇
やあま依ふ依て神等の愁惑ひらむ事を上ふ云へるが
如くれを今かく出坐て世中再お明らけく愛とく成
ぬまむ神く手字伸ぶ歌ひ舞ひ悦合ひ給ひらむ事も上
ふ云ふるが如し世中直正て明らぬ本ノの如く成然る
を大御事の極みあれむ神等互タカヒふ悦び給ひて大御神
此大御前ふ殊さらふ種く此物奉正各く自らも祝ひ給
ふるあ依るまば寤ゲも大直正饗と云はきあ正此を例と
去て大御神の大宮ハ更ふも申さば何処イふ於ても神事
う依るしく仕へ奉り竟とらむ後ふを其献物あど下し

賜ハ正誰もく悦び
の酒宴あど為るを直
會と云ふ也此時の大
御古事小效へ依あ正

於是八百萬神共議而於速須

佐出男命科千座置戸出祓具

令拔髮須及手足出爪而以手

爪爲手端吉棄物以足爪爲足

スエノアシキラヒモノトテ。ヲツバキナレシラニギテトラ
端凶棄物而以唾爲白和幣。以
ヨダリナシアラニギテトスナチレメアマノコヤネノ三コトニ
湊爲青和幣。乃使天兒屋根命
ノラソノハラヒノフトノリトラテ。サキアマノコ
宣其解除出太諄辭而割天小
スゲヲハラヒテ。レメハラヒヲヘヤホヨロツノカミタチセメ
菅拂而令祓竟。八百萬神等。嘖
ハヤスサノヲノ三コトヲテ。イミノレワザイトアシ
速須佐出男命而汝所行甚惡

カリカレナスミソアマツクニニマタナスミソアシハラノナカツ
也。故勿住天上。亦勿住葦原中
クニモネトトクイソコツネノクニニイロテ。スナチトモニカム
圀。宜急適底根圀云而乃共神
ヤラヒヤラヒクダレキ。ヨノヒトイニヲサマルオノガツメラハコレ
逐逐降矣。世人慎收己爪者。此
ソノコトノモトナリ
其緣也。

上モハカリテ
共議而之。師説ふ。おまも天照大御神。はと高皇產靈神の
命を受て爲。よ非也。神とち集て議。己給ふお。其を深き

所以ぞ有らむ。書紀古語拾遺を
おのまむ。解除の事を爲
おほまむ。産靈神は、大御心を
出たらしむ。其由下ふ云
を見て辨ふべし。○科千座置戸之
祓具ハスツモラ古事記に、
書紀、本書古語拾遺も同じり
まど言足らば、故令ハ書
紀第二、一書ふ責、其祓具と
あるに依て、祓具字を補す
科字を、書紀師説ふ、凡そ波
良比ふ二つに、其一は、伊邪
那岐大神の阿波岐原に禊祓
如し。一は此の解除に如し。
是罪犯ある人、科せて、物を出
去贖はるるを、かゝまむ。
其事も意も、二別あるに似
ぬれど、本を一に、れり。履中
紀に、車持君、罪有て、負惡解
除善解除而出於長者崎令、
祓禊とあるを以見まむ。犯
ある者の波良比も、水邊に
出たらしむ。

祓けり。是罪犯も穢も同じ
らまむ。れり。大祓詞に、伴男能
八十伴男乎始。氏官く、
よ仕奉留人等乃。過犯家年
雜く、罪乎。今年六月晦之
大祓爾。祓給清給云く。速
川能瀬坐須瀬織津比咩止
云神。大海原爾持出奈武
云く。四国、卜部等。大
川道爾持退出。氏祓却止
宣此文を思ふべし。罪犯を
解除ふも。穢汚を清むる禊
と全同じ。穢を即罪あり。罪
を即穢の段に云ると併考べし。
まど穢字も通をして、罪と
云ふ。おと仲哀、卷四、大祓
の所に、委くいふべし。け
罪何れも穢何れも。其重は
輕さふ隨て。同く波良閉
に、るを。上代の法あり。然
るを漢國の制を、此み、專ら
ひ、法も、廢まゆき、おほ
れ。然るを、波良閉の中、昔
までも、神事

不付あるおやふた。猶此法を用ひらまて。大上中下品く
 此祓何_レ正し_レこぞ。古書ども不見也。そは仲哀卷国之大祓
此処委くいふは
 けて其祓具を出さ_レちむる事也。今考る_レよ。二義何_レ正。一_ツふ
 ち。其祓_レ用ふる色く此物を科_レせて。出さ_レしむるなり。具祓
 と書ま_レざる具。ま_レ多以唾_レ爲白和幣云くとあ_レはも。祓_レ用
 字を思ふ_レはし。ま_レ多以唾_レ爲白和幣云くとあ_レはも。祓_レ用
 ぬ物_レ取ま_レ正。はと雄畧卷_レふ。齒田根命罪何_レ正。以_レ馬八
 匹。大刀_レ八口。祓除罪過_レと何_レ正。馬大刀を祓_レ用ること
大祓詞_レ高天原_レ耳振立_レ
聞物止馬牽立氏_レぞ見え神祇令_レふも上_レ祓刀_レと何_レめ此
古書ども不見也。抑馬を用_レる所以_レを耳振立_レ聞物止と有
如く神_レちの其祓字速_レ不聞召_レ受よと云意ある_レおや上
文_レふ云_レ掻別氏所_レ聞食武_レと何_レを合_レせて知ら_レは此_レ不
准_レへて思_レふよ。太刀を罪穢を断_レ絶意_レ用_レる_レふや。此_レ外_レ用
る種_レくの物も其名ま_レとハ其形何_レ依_レひ_レをその物此_レ用_レふ

ども就て意を取
こと多_レる_レはし。ま_レと延曆元年五月の大政官符
格令集解_レふ。定_レ准_レ犯_レ科_レ祓_レ例_レ事。一_ツ大祓_レ料物_レ八種_レ云_レく。
ども出_レ於_レ。

一_ツ上祓_レ料物_レ六種_レ云_レく。一_ツ中祓_レ料物_レ二種_レ云_レく。一_ツ下祓_レ
 料物_レ二種_レ云_レくと何_レる。その種_レく物_レを祓_レの料物_レふて。
 罪穢の重_レ輕_レま_レは_レりせて。科_レに_レぬ品_レあるを以て。思_レひ定_レむ
 ばし。今云_レ此事_レお大祓詞_レ再_レ釈
一_ツふ_レを。彼阿波岐原の禊_レ
ふ。委_レく注_レを併_レせ考_レべし。
 祓_レの時_レ。御身_レふ著_レぬる物_レ等を盡_レし_レ投棄_レ給_レへ_レめ_レし如_レく
 不_レ罪_レ犯_レ何_レる者_レも。身_レ此_レ穢_レと_レ依_レち_レま_レむ。其_レ身_レふ所有_レ物_レも。皆
 穢_レぬ_レ依_レを。拂_レひ棄_レる意_レふて出_レけ_レ正。故_レ後_レ世_レまで_レ也。祓_レ不
 用_レる種_レく物_レを。終_レみ_レみ_レお水_レを流_レし却_レけ_レ正。お_レ下_レふ云_レべ
し。か_レくま_レむ_レ祓

具を科^カけるに、もと右の二の意あるを、異因の賤刑と、一
意^イに説^セ成^セは、最^モも古^コ意^イに非^ヒず、孝^{コウ}德^{トク}紀^キに有^ユ被^レ役^{ヤク}之^シ民^{ミン}路^ロ頭^{トウ}
炊^シ飯^{ヘン}於^{ケル}是^レ路^ロ頭^{トウ}之^シ家^カ乃^ハ謂^フ之^レ曰^ク何^ニ故^ニ任^シ情^ニ炊^シ飯^{ヘン}余^ガ路^ロ強^{キヤウ}使^シ使^シ使^シ
除^ク復^ス有^リ百^{ハク}姓^{セイ}就^テ他^ニ借^リ餽^ク炊^シ飯^{ヘン}其^ノ餽^ク觸^ス物^ヲ而^{シテ}覆^ス於^レ是^レ餽^ク主^ノ乃^ハ使^シ
祓^ハ除^ク如^シ是^レ等^ノ類^ノ愚^ク俗^ノ所^ニ染^ル今^ニ悉^ク除^ク斷^ス勿^シ使^シ復^ス為^ルこ^ノま^ハ其^ノ祓^ハ
物^ヲを取^リて已^ムが利^ヲおせし事^ト聞^ク也^{ナリ}そ^ノを^ハや^ハ世^ノく^ハぬ^ハて
本^ノ意^ヲ字^ヲ失^フへ^ル民^ノ間^ニの^ハあ^らむ^ハし^ハふ^ハ法^ヲふ^ハ叶^ハず^ル事^ノ有^ル
ふ^テ為^ル來^ルれ^ル依^ル事^ニ中^ニ自^ラら^しみ^ハ祓^ハ法^ヲふ^ハ叶^ハず^ル事^ノ有^ル
尤^モを^リ流^ヲ傳^ヘて^ハ遺^スる^ハふ^ハぞ^ハ有^ル依^ルべき^{ナリ}千^ノ座^ヲ私^ニ記^スふ
座^者是^レ置^ク物^ノ之^ノ名^也と見^エて^ハ其^ノ祓^ハ物^ヲを居^ス置^ク物^ヲをい^ふ案^ニ
て^ハ何^ノふ^テ人^ノ座^處を久^ク良^キ章^トと云^ふも同意^{ナリ}也^{ナリ}故^ニ書^紀
も^ハ何^ノふ^テ人^ノ座^處を久^ク良^キ章^トと云^ふも同意^{ナリ}也^{ナリ}故^ニ書^紀
字^ヲを^ハ千^ノを其^ノ數^ヲお^す犯^スの^ハ重^キさ^ハ輕^キし^ノ任^スふ^ハ祓^ハも^ハ重^キさ^ハ輕^キ也^{ナリ}
有^テ祓^ハ具^も多^ク如^ク少^キ品^ハ有^ルを^ハ此^ヲ極^テ決^テ重^キけ^まむ^ハ極^ニ
多^クきを^ハ千^トと云^ふ也^{ナリ}後^ニ世^ニ四^ノ座^ヲ置^ク八^ノ座^ヲ置^クお^ど云^ふ名^ノ
目^ニ遺^スる^ハを^ハ以^テ見^レれ^ど幾^ノ座^ノ

と云^ふて^ハ祓^ハの^ハ志^ヲ置^ク其^ノ物^ヲを持^リ出^テ祓^ハる^處置^ク意^ト
を^ハ定^シし^ハあり^{ナリ}置^ク其^ノ物^ヲを持^リ出^テ祓^ハる^處置^ク意^ト
云^ふ依^ルれ^バ万^ノ葉^ヲ置^ク幣^トも^ハ奴^ノ佐^ヲ於^テ伎^トも^ハ見^エ大^ノ祓^ハ詞^ト
ふ^ハ大^ノ中^臣天^ノ津^ノ金^ノ木^乎本^ノ打^切末^ノ打^斷氏^千座^置座^爾置^足
波^志氏^と何^也師^說ふ^ハ金^ノ木^と書^クる^ハ借^字也^{ナリ}是^レ祓^ハ物^ト
金^ノ木^を置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
木^ノ字^本末^切て^ハ千^ノ座^置座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
也^今思^ふふ^ハ此^ノ説^ヲま^はす^ハ也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
云^ふに^ハ其^ノ置^ク座^ヲ置^クを^ハの^ミ云^ふ也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
刑^具と^ハ云^ふに^ハ甚^ク誤^ル也^{ナリ}○今^ニ云^ふ世^ノ小^ノい^ハや^ハ志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
を^ハ於^テ云^ふに^ハ諺^ハ何^レ此^ノ大^ノ志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
此^ノ志^ヲ置^ク座^ヲ置^クを^ハの^ミ云^ふ也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
目^ノを^ハ造^ルに^ハ金^ノ木^と云^ふに^ハ少^キ物^ヲを^ハ志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
座^ノを^ハ造^ルに^ハ金^ノ木^と云^ふに^ハ少^キ物^ヲを^ハ志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
や^ノの^ハ木^ノ字^金木^と云^ふに^ハ古^ノ言^ハ也^{ナリ}志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
依^ルに^ハ天^ノ野^ノ信^景云^ふ中^臣の^ハ祝^詞天^ノつ^の志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}
ト^部家^ノさ^るに^ハ附^會して^ハ本^ノを^ハ志^ヲ置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}置^ク座^ヲ置^クと^ハ聞^ク也^{ナリ}

佳瑞穂抄子其字をのち侍依濃州のきあり山入金木取と云るを何ぞと思ふむあり中臣祓此本義子くをし誠子神代の言葉鄙子残り臨時祭式子凡祈年月侍る事は子知らま侍依と云子也

次神今食新嘗等祭料置座木と何依を置座を造る料の木をいふを本をクラヲオクキと訓依を誤あり篤胤云同書小楛榑四脚各高四尺はて其置座小四座置八座置と長三尺五寸ともあり也

云品何也木工寮式小四座置八座置以木爲之長者二尺四寸短者一尺二寸各以八枝爲束名稱八座置長短各以四枝爲束名稱四座置と見也四時祭式斎宮式大嘗祭式名見今考ぬ置座を祓物を居置く座ある故の名也

て四座置八座置も本ハ四座の置物八座の置物と云也

置座の數以て云ぬるおまむ一種此物の名小非也然るをや後おびてを其名のみ古小て物れさ見る小他の雜ば此物を居置ぎ料と見えば每別を居置べき物れ状小非然ま引る木工寮式小云るも象を居置る結造る物お依べし今世小女何依柳管おどの連糸も結造る物お依べし今世小女何依柳管おどのさる小推度らる然ま後世のも加此置座を造る彼座の數小加へて四座置八座置を云る也後世の象むか此祓此詞小天津金木乎云くと何依も後世の象む非也彼全文をや後小定むる物お何也は詞を古のを用ひとまむ也

置之祓具と云て有き字置戸としも云をし未思ひ得也師ハ應神天皇卷小伊豆志袁登賣神を兄弟の男れをむひる事を云る段小誼戸と云る言字引て此

其、誼事、用ひぬる種、物を指て、誼戸を云へれむ。此も置座、置く祓具を指て、戸と云あり。然まむ、千座の置物と云む。如しと言、祓具を、書紀ふ。此云波羅閉都母まむ。まむい、有らむ。能と何。○髮須。記ふ、切鬚と有て、髮の、おと、お、書紀。今、彼、此、合せ。和名抄、野王案、髮、和名加美、首上、長毛。也。は、と、説文云、髭、口上、鬚也。鬚、頤下、毛也。髭、和名加美豆。比介、鬚、和名之毛豆、比介、を、何まむ。此、口、此、上下の、差別、あ、比、宜、あ、鐵胤云、須、を、説文ふ。面、毛也。と、何、め。了。口、上、頤下、頰、れ。總ての、比介を、云、字、あ、ま、む。此、ふ、應、へ、む。○及、手足之、爪。於是、り、是、ま、で、む。記、を、本、よ、と。師云、及、字、は、乎、母、と、訓、ば、し。爪、和名抄、四、聲、字、苑、云、爪、手、足、指、上、甲。

和名豆、女、有、む。○以、手、爪、爲、手、端、吉、棄、物、以、足、爪、爲、足、端、凶、棄、物。お、書紀、一、書、よ、以、手、爪、爲、吉、爪、棄、物、以、足、爪、爲、凶、棄、物。足、端、凶、棄、物、を、何、る。書紀ふ、手、端、吉、棄、此、云、多、那、須、衛、と、を、併、せ、て、文、を、成、せ、む。能、余、之、岐、羅、毗、と、何、め。手、端、吉、棄、を、の、み、註、て、足、端、凶、棄、を、何、る。師、説、ふ、お、此、吉、凶、棄、物、は、い、ち、も、依、善、惡、祓、除、の、事、也。本、あ、む。然、ま、む、も、善、惡、祓、除、の、事、也。其、儀、を、記、せ、依、物、あ、り、ま、む。如、何、れ、る、を、善、い、ち、あ、依、を、惡、と、も、知、ら、む。云、ふ、ハ、後、人、の、例、此、推、當、の、誤、あ、り、若、さ、ら、バ、上、よ、引、る、車、持、君、の、善、惡、祓、除、を、い、ち、よ、解、べ、き、ぞ。犯、あ、る、人、の、爲、ふ、福、を、招、く、と、有、べ、き、か、は、右、小、引、る、延、曆、廿、年、此、官、符、中、ふ、も、承、前、神、事、有、犯、科、祓、賈、罪、善、惡、二、祓、重、科、一、人、云、く、と、何、る、も、車、持、君、何、る、事、も、同、じ。ち、て、か、く、手、足、の、爪、を、拔、さ、る、も、祓、具、あ、ま、む。

上よ云る二意を以て解べし。一ッふて此祓を極て重死祓
ある故ふ。祓物も極て多く。千座を徴ゲ依レおまバ。須佐之男
命の所有モタヘ依物此限正を取ても。猶足タラざる故ふ。其御身小
生多る髪須爪までを取て。祓の料物ヲ用フるル也。亦書紀以唾
為白和幣、以漬為青和幣、とも一ッふハ。所有モタ依物も穢キ多
る依レて。祓料あるを知ばし。一ッふハ。所有モタ依物も穢キ多
き也。拂ヒ棄レ依意レ依レの。輕シき犯レを穢キ淺シき故ハ少シ物ヲ
出シ棄テ清マるヲ殘シ。是ヲ犯シ重クして。極テ淡キ穢キおまカ。
所有モタる物ヲをみおラ棄テも。お布清マ正ハはテざる故ふ。
其御身小生オヒ多る依物までを。拂ヒ棄テ清ム依レあり。けまバ
棄ル物ヲ。みレ穢カ垢レある故ふ。伎羅毘物キといヒ棄ル物ト書

まゐる依も。此意お正。後世ふ。人形を造テ流ルも。穢ト依身
體ヲむシ。されラ棄テ。清ムよ替フ意レ也。のハまカ此須
事ヲ。右、二意あるを。纂疏小。肉刑之始也。と此トまヒて。
皆人モ刑ト心得ルハ違ヘり。刑トを其義異ある字ヤ。
何レ也。此師説を本トして。今考ルふ。手端物タナ足端物アシとモ古
語拾遺崇神天皇の御世の事記スせるル也。手末之調タナてふおカの有テ。此
を手ふテ造キ依物ヲを云フと聞ケ依レを思フふ。手足ヲをイ勞カ
死テ造レる物ノおカ殘シ。古の雅言ニよク分ケ云フふテ。
其ヲ身ヲおラ手足ヲをイ勞カ死テ造キる物ヲ。殊ハ惜ム思フ
おカあるヲ。其ヲら祓物ヲ出シて。清マはると云フ義ヨて。
手端吉棄物。足端凶棄物と云フもカ何レらジ加ハ。手ハ吉トい
ひ。足ハ凶トい

云るを、手ハぬふとく、足ヲ申き物故、のく言るのみ、
て、餘ヲ深き意ヲ有まじくおぢ也、其ヲ男神、此ヲとを足
名推、女神の方字、手名推と云て、男神ハ
い、やしき方を負せしむるをも思ふべし、
此所有る物を盡す。祓具ハ出さし、免ねまぢ、おぢ手末足
末の物代として、其爪を抜て、出ぎま末とる由、
下、文此、以唾為白和幣、云くと、
るを以ても、然を思われと、
ふ字、車持、君小科せぬる趣也、此の吉棄物、凶棄物、
ゆげハ聞也、まぢも、延曆、官符ハ、善惡二、祓重科一人と、
依を合せ思ふ、此を事、趣異、ゆげハ聞えと、
考ふべし、○以唾為白和幣、以涕為青和幣、
書を取、和名抄ハ、切韻云、唾口中津也、和名豆波岐、
戸、段、第二の一

抄ハ、字書云、涕、鼻液也、和名須、波奈と、
を、青けま、バ、かく言、依ある、
青和幣の代、を、為と、依由、
○乃使天兒屋根命、宣其解除之大諱辭、
也、と云、まて、を、書紀、石屋戸、段、第三の、
ハ割拂、天、小菅、云、おぢ也、神樂歌を取、
○宣解除之太諱辭、とは、上ハ云、
佐之男、命、此御荒を、
牙掃却らむ、おとを、祓戸、神、
由下ハ委く、云、字、見、知、
割、天、小菅、拂、而、神樂酒

殿歌小也。戸久毛能。奈可奈留久毛乃奈加止三能。安乃乃古須介乎佐支波良比。以乃利之古止波。計不乃比能多女。と何依也。正ふ此時兒屋命の管もて祓し於る由を詠る。小て。然る古傳の有しふ本おれ依あるあや炳し。故あの歌詞此傳に依て。文を成せ也。大祓詞小。天津宮事以氏。大中臣云く。天津管曾乎。本苜斷。末苜切氏。八針爾取辟氏。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。と見え。万葉三卷長ふ哥もふ手ダ次タのひあふ懸て。天よ在る左佐羅能小野之七相管手ナ取持て比さかスと此。天川原ふ出立て。潔身てましを。まニ十五ふ。そ此佐保川よ石ふ生依管根取而志燃ぬぐさ。解

除てまし哉。れぞ何也。祝詞考よ。此歌どもを引て。古の祓小を割サキある管を手小取持て。塵あぞを拂ふが如きこと。をせしれ也。然る古書どもふ祓物くはく載ある中人有べんまきと。祓柱を見え祓む。此を祓ふ用ふと云を疑ふ也。まと式よ。大祓は用ふる物どもをバ皆奉て。祝詞料の布短帖までも見えと依ふ。詞を書く紙筆をのせざるが如く。管を祓奉仕る官人一人の手よとる物ふて。斎て作る物よも何まき。其人のみおと解ましを然依説よて。後うらあに故小奉さ依れり。までも管を持て拂ひしあや疑あく。其は天上ふて此時爲於依故實を用ふ依あ也けり。師説よ。須宜須賀と云名をし有て負るうさる故ふ祓も用るふや。又を清と云此通ふ故う。いおままれ。清交意ふ取て用ふ依ありや。はちて小管と云る小を。例の稱言よて。笠ふも燃ふあ

此菅ふ。万葉十五哥小菅根とあるも、あつ菅ふて根を
り。此を祝詞考よ菅の根と訓まじハ非ありま。或人ハ
菅を根ふら取れる多云々云り。あつ猶考べし。けり
同三卷ふ七相菅と何依名義をいまだ思ひ得。若くは
七節うま。十ふの菅こも七ふ三ふあど何るを編目
云と聞ゆま。此とを異ある。但しま。七割拂とを割
ふよも編べき長高きよ死菅と云あ。ろ。割
て拂ふとくしあ。大祓詞ふ菅曾と云るを。其割とる上此
名れ。其由を神武天皇卷大祓。○祓竟とは祓きは必盡
去残云。科千座置戸之祓具と云と。逐降矣。凡て祓
竟るにげれ。○噴を迫や同く。彼天津罪此積を言迫る
としふて。下ふ。武甕槌之男神の建御名方命多。諏方海ふ
迫到依や何る迫も。即是ふて。此を言遁る。ばき言れく言

迫免ある由あれむ。須佐之男命も遁る。ばき辭なく窮
畏り給ひらむこと。天上ふ勿住そ。葦原中囿も勿住そ
と。諸神の迫言がほよ。逐ハま給子依ふて知ばし。
凡て世年留を狭むるあ。世麻留を狭。可畏死申し過
まるふて。自と他を云。差のみれり。似多きども。此神も。かく理ふ窮に給む。彼御稜威を
震ひ給むむ。いりゆ。まき禍事の出来あまし。字。
諸神の言理も服ひ。其非を悔坐して。下津囿も往坐ま。
其御心此直く坐ま。と。想察奉依。あ。此神の其
心此布ど可畏るま。次段。○惡也。あ。本も無頼と何
段も云を見て思ひ辨べし。○惡也。あ。本も無頼と何
ゲナレ。は。コノモンゲナレ。あ。ど訓ま。漢文の無頼を
何あ。ち。小訓ると聞えて。古言ともあ。不え。怒訓さま。故

今^コ意を得^テ阿志加理^{アシカリ}と訓べし。或^レれち悪く在^リとい
て文を改^メ於^テ。○底根^{ソコ}固^クむ。即^チ下津^{シモツ}固^クむ。夜見^{ヨミ}固^クむの^カを^ル由
む。上^ノ小^コ既^ニ注^スり。○第十二段第十八段。○神^{カミ}逐^ル降^ル矣^ニ。神
夜^ヤ良^ラ比^ヒ夜^ヤ良^ラ比^ヒ降^ル志^シ伎^キを訓^ベし。此^レ古^コ事^{コト}記^シ。神^{カミ}夜^ヤ良^ラ比^ヒ
依^テ訓^レ書^キ紀^キ。逐^ル之^ヲ。此^レ云^フ波羅^ハ賦^シと^ル。神^{カミ}を^ル。凡^ソて神
波^ハ字^ジを^ル師^シ言^ハの^カ如^ク夜^ヤの^カ写^シ誤^ルを^ル依^テ。神^{カミ}を^ル。凡^ソて神
此^レ上^ノ事^{コト}小^コ多^ク附^ク云^フ詞^ジふ^テ。上^ノ見^ル也^ニ。第十段。夜^ヤ良^ラ布^フを^ル。
師^シ説^ク。本^ノ夜^ヤ流^リを^ル延^ビと^ル依^テ言^ハふ^テ。良^ラ布^フハ^シ流^リ良^ラ比^ヒ
意^ヲを^ル聊^カ異^ナる^ル小^コ似^シ多^ク也^ニ。け^レて^レか^ク疊^テ云^フ例^レを^ル神^{カミ}集^ル神^{カミ}
祝^ヒ神^{カミ}議^シ神^{カミ}問^フ神^{カミ}和^ス神^{カミ}掃^クあ^トど^レ如^シ皆^レ上^ノを^ル體
語^ヲ下^ニ用^フ語^ヲ也^ニ。今^コ云^フま^ニと^ル中^ノ小^コ爾^レて^レふ^レ辞^ヲを^ル加^フて^レも^ル云^フ
其^レ神^{カミ}夜^ヤ良^ラ比^ヒ夜^ヤ良^ラ比^ヒ岐^ノと^ルも^ル伊^ハ

都^ト之^ノ知^ル和^ハ伎^キ尔^レ知^ル和^ハ伎^キ氏^ノ
あ^トども^ニ此^ノ格^ノの^カ言^ハれ^テ也^ニ。け^レて^レ逐^ルは^シ今^コ俗^ノ小^コ云^フ追^フ放^ルあ^トど^レ
何^レ也^ニ。け^レて^レ後^ニ此^ノ大^ニ祓^ハ神^{カミ}事^{コト}は^シ即^チ此^ノ時^ニ此^ノ故^ノ實^ヲの^カ隨^フ行^ハひ^給
ふ^事あ^ルあ^トとは^シ今^コけ^レら^ニ言^ハは^シて^レを^ル也^ニ。其^レを^ル皇^ノ美^ノ麻^ノ命^ノ
天^ノ降^ル坐^スひ^給也^ニ。天^ノ御^ノ祖^ノ命^ノ也^ニ。此^ノの^カ天^ノ津^ノ宮^ノ事^{コト}也^ニ。ま^ニ行^ハり
と^ル。御^ノ言^ハ依^テし^テ坐^スる^ルふ^テ。罪^ノ穢^ヲ乃^チ清^マま^ス也^ニ。伊^ハ邪^ノ那^ノ岐^ノ大^ニ
御^ノ神^ノの^カ禊^ハ祓^ハ給^フへ^テ依^テ時^ニ生^シ坐^スる^ル。祓^ハ戸^ノ神^ノ等^ノの^カ持^テ失^ヒ給^フ
小^コあ^トむ^ル有^ル也^ニ。其^レを^ル彼^ノ神^ノ事^{コト}也^ニ。諸^ノ小^コ宣^ハ聞^クせ^給ふ^詞也^ニ。
高^ノ天^ノ原^ノ爾^レ神^ノ留^リ坐^ス皇^ノ親^ノ神^ノ漏^ル岐^ノ神^ノ魯^ノ美^ノ乃^チ命^ヲ以^テ氏^ノ云^フ。皇^ノ御^ノ
孫^ノ之^ノ命^ヲ波^ノ豐^ノ葦^ノ原^ノ乃^チ水^ノ穗^ノ之^ノ固^ヲ乎^ニ。安^ク固^ク止^ム。平^ク久^ク所^レ知^ル食^ヲ止^ム事^{コト}
依^テ奉^ル伎^キ云^フ。如^ク此^ノ依^テ左^ノ志^ヲ奉^ル志^ヲ四^ノ方^ノ之^ノ固^ヲ中^ノ登^ル。大^ニ倭^ノ日^ノ高^ク見^ル

之圀乎。安圀止定奉^リ氏云く。平氣久所知食^サ武圀^ノ中爾。成出
武天之益人等我云く。許く太久乃罪出武。如此出波。^{以上}
意、高天原小神留坐^ル天津御祖命の皇御孫命を葦原
中、圀を安圀と所知食せと御事依^リ降^ル給へるま^ハ、
大倭、圀字、四方の圀中、此安圀を定奉^テ坐^シ奉^ル依^リ其天降
し賜ふ時、安圀と所知食さむ、圀中、小成出^ル天之益人
等の過犯^ル罪の許^ク太久出^ルあむ、あ^リ出^ルらむ、ハ云
云せと詔^ヘゆ、いふ意^ニて、此^レ天^ノ御祖神^ハ御言^ニ依
しを本^ニおし、成^ル神武天皇御世^ノ當^ル時^ノ事實^ヲ合^セて、天
種子命の綴^リ成^ル詞^{ナリ}あり、次^ニ此^レ詞^モあ^リ也、文^ヲ法^ヲ深^ク
心を著^テ思^ヒ辨^ルふ詞^{ナリ}あり、祝^詞考^後釈^トも、小^シ此^レ義^ヲ思^ヒ
洩^ルさまと^シ此^レ委^キ譚^由、ま^と此^レ詞^ヲ種^子命^ノ綴^リ成^ル詞^{ナリ}
あること^ノ論^ハひ、神武天皇卷^ノ此^レ詞^ヲ種^子命^ノ綴^リ成^ル詞^{ナリ}
む、彼^レ處^ニ委^ク云^ベし、瑞穂抄^ノ大^祓詞^ハ天^ノ種^子命^ノ作
と云^フ傳^{アレ}れむ云^ク、天津宮事^以氏^大中^臣天津金木^乎。
と云^ルむ、然^ル説^ハ也、天津宮事^以氏^大中^臣天津金木^乎。
本打切^末打斷^氏千座^置座爾^置足波志^氏天津管^曾乎^本。

苜斷末苜切氏。八針爾取辟^氏。天津祝詞乃太祝詞事乎宣
禮。^此一^節を解除^セべき式^法を誨^賜へる御言^ニて、文^意
て、事始^マる、祓^事の例^ハ此^レま^ハ、行^ヒて、大^中臣^其事
を執^ル、天津金木^ハ本^ニ打^切て、千座^ノ置^座を造^リ、其^座
ごと^ニ祓^物を置^足は^して、天津管^ハ本^ニ苜^斷ち、八針^ハ
取^割き、そ^を以^テ拂^ヒ、天津祝^詞乃^太祝^詞言^ヲ以^テ祈^白
せ^とあ^り、其^レ專^ト祓^戸神^等言^告る祝^詞あ^る、如此^レ乃^ハ
が、此^レ漏^トるこ^トを、下^ニ委^ク論^フを、見^テ知^ベし、如此^レ乃^ハ
良波^{天津神波}云^ク、圀津神波^云く、所聞^食武^{如此}所聞^食
氏波^{皇御孫}命^乃朝廷^乎始^氏、四方[、]圀爾^波罪^止云^布罪^波
不在^止云^く、高山^之末^短山^之末^與理^佐久^那太^理爾^落多^支
支^都速^川能^瀨坐^瀨織^津比^咩止^云神^{大海}原^爾持^出奈^武、
如此^持出^往波^荒鹽^之鹽^乃八^百道^乃八^鹽道^之鹽^乃八^百

會爾座速秋都比咩止云神。持可く吞氏牟。如此可く吞氏
波氣吹戸爾坐氣吹戸主止云神。根因底因爾氣吹放氏牟。
如此氣吹放氏波根因底因爾坐速佐須良比咩止云神。持
佐須良比失氏牟。如此乃良波と云るなり。失氏牟と云る
までハ上件事依し給へる祓事を天津
神因津神の所聞食し受給ひて祓戸神とちの
本ふ返し却り給ふ事状までを論給へるなり。とある文
此扱ぐきを熟讀み熟味ひて。大祓の神事を。本天御祖命
の御依し此まふく。行給ふ御事ふて。罪穢此清まはる
ぞ。祓戸神とち此持失ひ給ふと云。思ひ辨ふは。大
詞ある。瀬織津比咩也。即禍津日神速秋津比咩也。即伊豆
能賣神氣吹戸主ハ即直毘神坐候こと。上第九四段
見えとるちて祓戸神四柱の中ふ。瀬織津比咩。氣吹戸主
がごとし。

は。禍津日神直毘神の亦名とを申せども。上九四段も云
は如く。其本體也。大御神と。須佐之男命ふ屬て。天上と夜
見とふ分ハ坐まむ。祓戸ふ坐して。罪穢を失ひ給ぬと云
は。まご其幸魂の活用ハタラクキ坐まひ故ハ。此亦名也。實は祓戸
ふて。功をふし給ふ御靈を申去御名ふおむ有ハ。依ハ故ハ大
了。此御名を
挙とるなり。ちて此時此禍事を。禍津日神の穢を惡み給
ふ御荒びと云。起まはるを。祓事ふと云て。須佐之男命
此諸神の嘖セメふ服ソツひ坐した。やぐて禍津日神此御心の和ナゴ
み坐るよて。是即か此祓物ふ負せて。流し却る罪穢を。ま
扱此神此受取るふ理なり。其在禍事を起候と滅候と
表裏の違ひあるが如くお

まども是ぞ天御祖神の始給へる祓かかくて此神終ふを
の主意よて深く妙ある謂ありけり。此由第七十九段
須佐之男命と共に根固ふ往坐しうぞ。云を合せ考ふ
罪穢を先受取ゑる幸魂。瀬織津比咩神を本謂は
ふく。永く祓戸を掌して其功をれし給ふ故ふ。大祓詞
よ。先此神の大海原ふ持出給ふ由云るあり。但し其や
祖神此御言依此傳あること。ちて国土う起る禍事罪穢
上よ委く辨へゑるが如し。此本因此大凡を思ふよ。五此別は正一ふを。禍津日神此
本體を。夜見固ふ往坐まど。上第二十段云依如く其御靈
は。此固土よ充滿ゑれむ。穢は正て。忽ふ荒び給ふ禍
事。二了て。此神の徳はいとも大死ふ廣く坐ませども。實

はかの荒御魂ふ坐ひ故ふ。好き御意を以て爲給ふこと
も。自然ふ荒く志く。そを上件須佐之男命の御荒びの状
為給へるよ。且其大きく廣き御功此好事よ。いおぎ來
非ざるをや。其は韓固島を金銀ありとて皇美麻命ふ寄給へ
依惡事。其は廣き御恵あるを韓王が畏みの餘りよ。種々
此物を貢れ依中固此害と。三ふを。伊邪那岐命此脱棄
ある事も多きおど是れり。給子依穢物ふ因て。生れる神等此爲は禍事。此事上第
給子依穢物ふ因て。生れる神等此爲は禍事。此事上第
さちの生れる処まよ第四十三段万物之。四ふを。火神の
妖と何依処おどよ云るを合せ考ふべし。母都戸喫の処ふ
穢を惡ゑるふ御心を起し給ふ災事。おは第十八段豫
云るを合せ考ふ。五了は。餘諸神さち此崇の禍事おどあり。
善神さちといふども御心よふさをば所思食ひ事此有
まむ。怒りて禍字おし給ふこと。第廿七段荒御魂此処ふ

委く云るを合せ。世ふ有ゆる禍事此本也。大凡此五劫ふ
考子て曉はべし。所思^{オホエ}多^{オホ}也。考へて辨^ハべし。はてかく種く
漏^モはく。あやなく所思^{オホエ}多^{オホ}也。考へて辨^ハべし。はてかく種く
此別^ハあまども祓事^ハ依ては。皆解除^ハるはき禍事どもれ
也。其を何よまれ。禍事^ハやぐて罪穢^ハふて。穢を豫美^ハ固^ハふ
屬^ツく理^ハある故^ハふ。伊邪那岐^ハ命^ハの穢を惡み給ふ御靈^ハよと
して生坐^ハ依^ハ。瀬織津比咩^ハ神^ハ。其子受持^ハ多^ハるひ。御自^ハらふ
係^カ依^ハ係^ハらぬ撰^{エラ}びあく。先受^ツ取^テ。豫母都^ハ固^ハ此道筋^ハある。大
海原^ハよ持出^ハ給^フ。あま此神^ハ。解除^ハよ功^ハを爲^シ給^フ。狀^{サマ}よ
扱^ハ有^ル依^ハ。師説^ハと異^ハあり。大祓^ハ詞^ハ。はて祓^ハを行^ヒて。罪穢^ハを
清^ハ免^ハ流^ハ去^ハえ。豫美^ハ固^ハよ逐^ハひ却^ヤる所^ハ爲^ハふ依^ハ。故^ハふ。穢^ハを惡^ハむ

此神^ハ。先^ツかく持出^ハ多^ハるひて。はて穢^ハを清^ハ給^フ御靈^ハの神。
速開津比咩^ハ。禍^ハを直^シ給^フ御靈^ハの神。氣吹戸主^ハ。さし次^テ
持送^ハ也。速佐須良比咩^ハ。其を根^ハ固^ハふ持^ハは去^ラらひ失^ヒ給^フ。
あまぞ解除^ハ此大旨^ハよて。天御祖^ハ命^ハの御傳^ハ坐^ハ依^ハ。趣^オあまけ
依^ハ。今^ハあ^ハの事^ハを爲^ハむる也。祓具^ハを佐須良比咩^ハ神^ハ。
如^ク。己^ハが身^ハを須佐之男^ハ命^ハ。此^ハ如^シと心得^ハべし。あくて
此^ハ四柱^ハ残^ハ功^ハ。各^ハ異^ハふを坐^ハませども。あま深く思^ハふ。此
神^ハ。ち誰^イも餘^ア三柱^ハの御靈^ハをも兼持^ハ給^フひて。互^{カタ}ふ御靈^ハ幸
ひて。祓^ハの功^ハを相成^シ給^フ中^ハ。直毘^ハ神^ハ。伊邪那岐^ハ命^ハの
禍^ハを直^サむと欲^オして。生坐^ハる神^ハある故^ハふ。あま御功^ハを殊
う大^ハ死^ハく。廣^クいふ時^ハ。早川^ハの瀬^ハよ流^ハを出^スるとめ。根^ハ固^ハ

よ到^マてさけらひ失^スるはで。都^スて此神比御靈ふ非ざる
事なきハ。更ふも言はせ。言^ヒもて行けむ。始^ル八百万神と
ち此神集^カて議^カませ依^ルり。祓^ヒ竟^ルと依^ルまで。始^ル終^ルせ。依^ルて。
此神比御靈よと依^ル事ふむ有^ルる。委^ク云^レバ此^ノハ
要^スと有^ル事比大^キ。依^ルて速^ク佐須良比咩神^ト。佐須良比と云^ハ
意^ヲを注^スのこ依^ルり。依^ルて速^ク佐須良比咩神^ト。佐須良比と云^ハ
るこ也。既^ニ其生坐^スの處よ云^ハ依^ル如^ク。殊^ニふ深^キ御鼻比穢^ル。
流^ラ離^レ出^ルる時よ生坐^スして。其由^ヲを御名^ヲり負^シ坐^ス。實^ニ佐須良
之男^ト命^ト比分魂^シふ坐^マし。かく罪穢^キ字^ヲ持^テ佐須良比失^ヒ給^フ
ふ御功^ヲ依^ルと。須佐之男^ト命^ト比。此^ノ時^ニ逐^ラてま給^フまど。年久
ま^ク此^ノ因^ニふ坐^マして。種^ノの功^ヲを立^テ給^フると依^ル合^セて

按^メふ。須佐之男^ト命^ト比犯^シ給^フる罪^ヲを悉^ク此神比負^シ
持^テ。此^ノ時^ニ直^ク根^ヲ因^ニふ。佐須良はれ往^テ坐^スる依^ル依^ル。事^ノ實^ニ
と云^ハときハ。須佐之男^ト命^ト比負^シ給^フる依^ル依^ル。御名^ヲ依^ルる。此^ノ
神比負^シ坐^スるは。幽^キ契^ヲ依^ルる事^ヲ依^ルけ。上^ニ第^ニ七^ノ段^ニ。此^ノ神者。
與^ニ速^ク須佐之男^ト命^ト比合^セ力^ヲ而^テ座^ス神^也。と依^ル處^ニふ云^ハ依^ルり。説^ク
とも依^ル。此^ノよ思^ヒ合^セて。此^ノ妙^ニ依^ル理^ヲ字^ヲ曉^カ依^ル。あ^ハあ
のふ。言^ハふ云^ハ依^ル得^ルの^ト死^ス事^ヲ依^ルの^ト。さ^テ後^ニ世^ニ罪^ヲ依^ル
迂^リ却^ルを。佐須良ふと云^ハ。万^ノ葉^ニ三^ノ卷^ニ長^ク歌^フ。天^ニ有^ル左^ノ佐
此^ノ古^ノ言^ノの遺^キ依^ルるべし。万^ノ葉^ニ三^ノ卷^ニ長^ク歌^フ。天^ニ有^ル左^ノ佐
羅^能小^ノ野^之七^ノ相^ヲ管^ス。手^ヲ取^テ持^テ而^テ久^ク堅^ク乃^チ天^ノ川^ノ原^ニ爾<sup>。出^{立^テ而^テ潔^ク}
身^ヲ而^テ麻^之乎^{。と依^ル依^ル。天^上比^ノ故^ノ事^ヲ思^ヒて。詠^ル依^ル依^ル。}</sup>

を炳ヒらまむ。佐々羅之小野と云。此時佐須良比事サスラヒヒを爲と
依野。と云意此名ふて。此野の菅を取て。解除事成爲て。侍
て天河原トカガハラより出立多。禊スミを爲扱。といふ古傳此遺ユヅルまるる本
扱きて。詠依ある法し。まゝ十六卷の哥は。天尔有哉神楽
良能小野尔草苺草苺婆可尔鶉
乎立。毛と詠依を。毎々小野と云べき序詞。天上ある佐
佐良之や云るふて。故実よ違ふり。此哥よ依て。佐々良之
小野と云るべて野を云ふ。思ふ法。うらび上の長哥ナガカ
る。天有やいひ。菅を取て。潔身スミを云る。由を云るも。此時
此故事よ本扱るる名ある事を思ひ決むべし。又按よ。巴
竹をささく。らと云。言の本よ。名義をささく。と鳴をり
云ひ。其字以て。進ふ故。ふさけらふと云。よや。彼。侍て右長
あさまをせけ。や云ふけ。も進むる意れり。侍て右長
歌ふ。天河原爾出立而。云々云る天川原を。決キハて彼安
河原のおとふて。此河原よて禊スミを爲し。彼千座置戸チザエ此禊

物も。此川カハふ流し。ぬすむるむりし。其思ひ合はべき事ども
久那太理の外よ。委く云ふを見るべし。或人云。天川字安
河と云こと。ぬしりふ見とる。何の書う。忘れとりと云
巴。侍てまう。川原より出て。潔身スミと依を。伊邪那岐命イサナノヒメ此禊
之小戸コドふて。禊スミ給へる故實よ。依を依御事ミコトを正らむ
あやむ。云も更あゆ。かくて。此。因の禊スミを。川原より出て
行ひ。そ。此。物。大川。道。流。は。と
そ。大。禊。詞。小。天津。宮。事。以。氏。と。あ。ま。と。あ。る。し。天。上。侍。て。禊スミの。事。
此。故。実。を。效。び。と。る。ま。と。是。ま。と。あ。る。し。
は。上。件。禊スミ戸。神。と。ち。四。柱。の。御。靈。ふ。頼。て。禊スミひ。清。む。る。事。あ
まむ。上。小。使。天。兒。屋。根。命。宣。解。除。之。太。諄。辭。と。何。依。諄。辭。を。
必。あ。此。四。柱。神。よ。禱。白。ひ。詞。あ。正。ら。む。こ。を。炳ヒ焉ニし。加。く。て
まふ。後。の。大。禊スミ此。神。事。も。此。の。天。津。宮。事。を。以。て。爲スる。事。あ

まむ。必此神とちふ祈白は。天津詔詞のあくて有まじ
き理あるよ。其太祝詞此傳をらざるは。甚も歎るを志ぬ。
悲きおとあす。然依多世に學者とち此。彼大祓詞をやぐ
て神ふ白は詞れりと思ひ居るを。いと鹿れに加し。其を
彼詞を熟くよ讀考依よ。上此小註よも。うたぐ云る如
く。彼を皇美麻命の天降坐はと死。天御祖神の御言以て。
葦原中因ふ。何らも依天之益人等ふ。過犯せ依罪穢何ら
む時。大祓事を爲て。解除却る法き式法。天津宮事以氏と
云と。り太祝詞乎
宣礼と云。依までよとく。まよ其解除乃太祝詞を。天津神。
心を著て思ひ辨ふべし。まよ其解除乃太祝詞を。天津神。
因津神。祓戸神とち此。所聞食し受給ひて。罪穢を却ひ失

ひ給ふ状をも。御言依し。誨給へる事のまふく。此事を
爲て。百官人及四方因の人民此罪穢を。天皇命此。祓清免
給ふ由を。集侍れる人くふ。宣聞は詞よ。あそ何き。神ふ白
は詞よ。を非ざまばあす。其は彼詞の全文を。あまあくび
操返し。讀味ひ。餘此祝詞文とも
合せ考ふ。神の御前ふ。白は格。此辞とて。一。言どふ無
して。多。解除し。給ふ。故。由。為。方。ま。と。罪穢の。清まる。状。あ
ど。を。天津神の。依。給。へ。る。御言。よ。言。字。加。へ。て。記。され。と。依
よ。て。集。侍。れる。人。く。ふ。宣。聞。せ。給。ふ。詞。あ。る。あ。と。更。ふ。疑。あ
き。趣。れ。る。字。や。其。を。委。く。言。む。最。初。の。文。よ。天。皇。朝。廷。尔
仕。奉。留。比。礼。挂。伴。男。手。襪。挂。伴。男。鞆。負。伴。男。劔。佩。伴。男。伴。尔
能。八。十。伴。男。乎。始。氏。官。く。尔。仕。奉。留。人。等。乃。過。犯。家。牟。雜。く。
罪。乎。大。祓。尔。祓。給。比。清。給。事。乎。諸。聞。食。止。宣。と。見。え。終。文。ふ
も。大。祓。尔。祓。給。比。清。給。事。乎。諸。聞。食。止。宣。と。見。え。終。文。ふ
式。よ。稱。聞。食。刀。祓。皆。稱。唯。と。あ。る。を。思。ふ。べ。し。但。し。餘。此。祝
詞。と。も。不。其。を。神。ふ。白。し。お。も。参。集。ま。る。人。等。子。も。聞。べ
き。由。を。宣。こ。と。も。何。ま。む。其。ら。と。同。じ。趣。ふ。思。ふ。人。必。有。法

乃まど右のどぐひま白の祝詞も其くの神も白の例
の言は有て紛る事なきを彼詞も曾て然る辭は無
れば神も白の詞あらぬこと疑なきも此ぞ○是も就て
猶按ふ朝野群載も彼詞も中臣祭文とて挙ふるを
去かしこの文の異なるも有る中臣式も自今日始
止云罪波不在止高天原尔耳振立氏聞物止馬牽立
比清給事被戸乃八百乃御神達八佐平志加乃御耳
振立天聞食止申と何止此を師も加茂翁も言れ
くも昔の人乃古此事をも意を母あらで謾も詞替
るも此あること論なき必此の式ある詞を替
人子宣聞を詞もて神も白の詞もぬぬことよ心著
此詞をやがて神も白の詞もぬぬことよ心著
思をる神も白の詞もぬぬことよ心著
かく状も神も白の詞もぬぬことよ心著
まどこれ後加予とる文も決し加まば被戸
神とちも白の太祝詞を別も有るむ字式も載漏され
多味あるまど疑なき其を彼大祓詞も大中臣云く天津

祝詞乃太祝詞事乎宣禮と何止て。如此久乃良波と承
るも。熟く心を著て思ひ辨ふはし。神も白のべき祝詞を。
別も依し賜予ゆし。漏と味あるまど更も疑なき也も此
をや。若然らばとせむ。太祝詞事乎宣禮とを。何字宣と
とのせむ。如此久乃良波と承と味ある。必上も宣はき祝詞
此あ止て。其を宣竟あるを承て言ひ辭も味あり。そ此宣べ
き祝詞の無残いりもせむ。祝詞考も太祝詞事乎宣禮と
て祝詞を神も告る言あり。是も人の身祿被此事もま
祝詞とハハいも別も神代も詞と此み云りさまむ此も天津祝
詞も何は別も神代も詞と此み云りさまむ此も天津祝
るも非ありとて。其を辨牙られ。師の後釈もも太祝詞事
は即大祓も中臣の宣る此詞も指せるぬりと解まられ
ぞ共も考も此鹿うりしあ止る也考も言まし或人を誰か

正々む既くも心よくき事字あむ言かききる。○或人あ
不舊説子泥みて予が説を信ざる小近く譬へて論なら
くを多ふ呪ふべく呪禁の哥書て人におれ依と多其せを
そこふ呪ふべく呪禁の哥書て人におれ依と多其せを
誦あらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
らむう。使人途よて其短冊を失ひせを奪おむむむむむ
るを受と依人其字をみて此哥を誦べしとは即こ此消
息の事ぞと云て多ふざくを取落しあるこをよ心著で
あらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
も彼太祝詞言れれれれれれれれれれれれれれれれれれ
を平うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
て熟思べし。けて其漏あ依祝詞を。天御祖命此。大御口
から傳坐るふて。そを太祝詞事乎宣礼如此乃良波と何
傳坐依あぬこと。更祓戸神あちふ。祈白依詞あ依多。神事
不疑れ交ものをや。祓戸神あちふ。祈白依詞あ依多。神事
此多うの中ふ。禊祓此神事むの正重たを無まむ。天津祝
詞の多の依中ふ。此祝詞むうり重きは無く。天上ふて。此

時兒屋根命此宣給へ依辭も其あるばく所思るふ。餘の
祝詞を悉く傳ハま依中ふ。是のみ漏と依事を。悲しき事
此極あ依故う。年頃いぬく歎き思子正しを。猶深く考る
ふ。此を別ふ重き詞あ依所由ふ依て。式よをわざと載漏
さまた依うて。然る例を餘の詞もあり其ハ中臣家ふ
は。必まを傳られぬらむと所思ぬ。篤胤密よ其詞あ
此異ある処ま誤まる言あど多。校正しと依も有れど
此を別ふ所由ありて。式よを載泄されぬる子やとさ
思はるまむ此は記さむと容易げあ依故う。此けて大
詞のみハ姑く祓藏きて傳ふべき人を待ふあむ。けて大
祓詞也。上ふ引る歌共ふと正て。解除事此故實を想ふふ。
は於千座の置座ふ祓物を置足をして。祓戸神あちふ手

向^ムけ。菅^{スガ}此^{コノ}本^ホ末^マ切^キて。其^カを^ヲ手^テ小^コ執^シ也^{ナリ}。彼^カ、太^{タイ}祝^シ詞^ジ言^{ゴン}を^ヲ告^ツて。
罪^{ツミ}穢^{ケガレ}字^ジ祓^{ハラヘ}清^{スガ}米^メ給^{タマ}を^ヲむ^ク大^{ダイ}を^ヲ字^ジ祝^シて。菅^{スガ}を^ヲ以^テ拂^{ハラ}ひ却^カる^{ナリ}
事^{コト}成^ナ爲^ルて。然^{シテ}去^キ依^イ事^{コト}由^ユ縁^{エン}を^ヲ集^{ツク}侍^シを^ヲ依^イ人^ニく^テ小^コ宣^{ノリ}聞^キせ。そ
宣^{ノリ}聞^キの^{コト}詞^ジを^ヲ即^チ大^{ダイ}祓^{ハラヘ}詞^ジを^ヲあ^らわ^せて^シ河^カ原^{ハラ}小^コ出^デて^シ身^ミ滌^スして^シ終^ハ
小^コを^ヲ其^カ祓^{ハラヘ}物^{モノ}を^ヲ悉^スく^テ大^{ダイ}川^{カハ}道^{ミチ}小^コ持^チ出^デて^シ流^スし^テ棄^ス依^イ。是^レ古^コに
趣^ス亦^モ正^シけ^レ依^イ。後^ノ小^コを^ヲ漸^シみ^テ其^カ趣^スも^ヲ替^カへ^ルを^ヲ其^カ儀^ノ式^{シキ}と^シり
次^ノく^テ後^ノ書^ヲ見^エえ^テ依^イが^レ如^シし。亦^モ不^レ解^ス除^ス事^{コト}の
處^ヲよ^ク委^ク云^フを^ヲ見^ルば^シ。

○門^{カド}人^{ヒト}。北^{キタ}原^{ハラ}信^{ノブ}質^{ツグ}。市^{イチ}岡^カ殷^{イン}政^{セイ}。岩^{イワ}崎^{サキ}長^{ナガ}世^セ等^{トウ}い^ふ。大^{ダイ}に^テ古^コ史^シ
傳^{デン}の^ノ十^{ジュウ}二^ニ卷^{クワン}とい^ふ卷^{クワン}を^ヲか^く木^キ小^コ上^{ノボ}せ^て。師^シの^ノ御^ミも^ト亦^モ
奉^{タテマ}出^ダせ^レ依^イを^ヲみ^ぬの^ノ因^{イン}に^テ道^{ミチ}の^ノ中^{ナカ}。中^{ナカ}津^ツ川^{カハ}に^テう^はや^ぢ小^コ依^イ

免^メる。河^{カハ}村^{ムラ}秀^{ヒデ}豊^{トヨ}と。同^{ドウ}所^{ショ}の^ノく^まし^なる。馬^{ウマ}嶋^{シマ}穀^{コク}生^シと。は^あら
ひ^て亦^モ正^シか^くて^シ九^クの^ノ卷^{クワン}よ^シ也^{ナリ}。亦^モ此^{コノ}十^{ジュウ}二^ニ卷^{クワン}小^コい^ふる^まで。
合^アせて^シ四^シ卷^{クワン}を^ヲ第^{ダイ}三^{サン}秩^{ツク}小^コあ^らむ^依一^{イツ}表^{ヒョウ}を^ヲ以^テ長^{ナガ}世^セ信^{ノブ}質^{ツグ}等^{トウ}さ
ら^ふ云^ふ。此^{コノ}四^シ卷^{クワン}一^{イツ}書^{ショ}衣^イは^ぬ也^{ナリ}。も^はら^この^ノ中^{ナカ}津^ツ川^{カハ}小^コて^シ成^{コト}
功^{コト}た^らし。阿^ア那^ナ米^メ傳^{デン}多^ク。

古史成文 神代部 三卷
 古史傳 自初卷至十六卷 四秩刻成 古史本辭經 五十音 四卷
 神代系圖 箱入 一帖 同 雜軸料 一帖
 靈能真柱 二卷 神科詞記 一帖 玉多須喜 十卷
 太元圖說 石稿 一幅 古道學神号 同 幅 万聲大統譜 一幅
 弘仁歷運記考 二卷 神字日文傳 二卷 疑字篇 日文傳 附錄 一卷
 皇國度制考 二卷 祝詞正訓 二卷 大祓詞正訓 和字 一帖
 天津祝詞考 一卷 古道大意 講本 二卷 靜乃石屋 同 一卷
 皇典文彙 三卷 皇蒙入學門 一卷 入學問答 一卷
 牛頭天王層神辨 一卷 鑿宗仲景考 一卷 古今妖魅考 三卷

彫工 木邨房義刻

伊吹迺屋先生及門人著述刻成止書目 塾藏版

○古史成文	神代部	三卷	○古史傳	自初卷至十六卷	四秩刻成	○古史本辭經	五十音	四卷
○神代系圖	箱入	一帖	○同	雜軸料	一帖	○同	雜軸料	一帖
○靈能真柱		二卷	○神科詞記		一帖	○玉多須喜		十卷
○太元圖說	石稿	一幅	○古道學神号	同	幅	○万聲大統譜		一幅
○弘仁歷運記考		二卷	○神字日文傳		二卷	○疑字篇	日文傳 附錄	一卷
○皇國度制考		二卷	○祝詞正訓		二卷	○大祓詞正訓	和字	一帖
○天津祝詞考		一卷	○古道大意	講本	二卷	○靜乃石屋	同	一卷
○皇典文彙		三卷	○皇蒙入學門		一卷	○入學問答		一卷
○牛頭天王層神辨		一卷	○鑿宗仲景考		一卷	○古今妖魅考		三卷

○刻成書目

○德行式 <small>石指</small>	一幅	○立言文 <small>同</small>	一幅	○鬼神新論	一卷
○出定笑語 <small>講本附錄</small>	二卷	○悟道辨 <small>同</small>	二卷	○伊吹於呂志 <small>同</small>	二卷
○俗神道辨 <small>同</small>	四卷	○撞木隨	一卷	○木匠祖神号 <small>石指</small>	一幅
○赤縣歷代尺圖	一枚	○石指類	數種	○衣倉住神号 <small>石指</small>	一幅
○春秋命歷序考	二卷	○武道祖神号 <small>同</small>	一幅	○鑿祖神号 <small>同</small>	一幅
○宮比神御傳記	一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○日女島考	一卷
○古學二千文	一卷	○草木撰種錄	一枚	○叶古略	一卷
○神字彙	一卷	○喪儀畧	一卷	○荷田大人啓文	一卷

先生の著書凡て百部を數千巻に迫り、殆ど全書目録に於其書等の大意を別
小記せる著述書目録を見ても、其著書は、門人、生徒、同僚、河内盛徳等、

○神徳香蓮頌 一卷 ○古道訓蒙頌 一卷 ○

○

